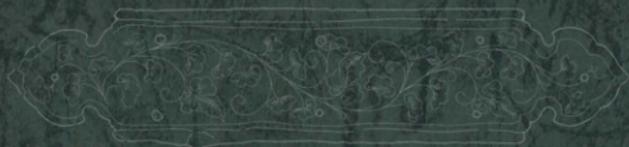


仙台市文化財調査報告書第350集

仙 台 城 跡

—追廻地区遺構確認調査—



2009年3月

仙台市教育委員会

仙台城跡—追廻地区遺構確認調査— 正誤表

頁・行	誤	正
P7 18行目	合計123点	合計128点
	全体の49%を占める	全体の47%を占める
P7 21行目	5点出土し、	6点出土し、
P7 24行目	30点出土し、	29点出土し、
P9 6行目	合計370点	合計376点
P9 32・33行目	274点出土し、丸瓦の70点と平瓦の175点が全体の89%を占める。	289点出土し、丸瓦の80点と平瓦の179点が全体の90%を占める。
P17 30行目	合計894点	合計905点
P22 27行目	合計664点	合計643点
P42 36行目	合計906点	合計930点
P43 2行目	248点出土し、近世のものは216点ある。	247点出土し、近世のものは215点ある。
P48	第3表 差し替えあり(裏面参照)	

仙 台 城 跡

—追廻地区遺構確認調査—

2009年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台城は初代仙台藩主 伊達政宗により築かれた近世を代表する城であり、現在、東北の中心都市となった本市は、今日まで仙台城とその城下を基となり発展してきたといえます。そのようなことから、仙台市民が市のシンボルとする仙台城はその歴史的価値のみならず、本市を語る上では無くてはならない存在といえます。

仙台城跡の本格的な発掘調査は平成9年より開始した本丸石垣の修復事業に関わる本丸石垣での調査といえます。この調査では、政宗の入府以前にこの地にあったとされる国分氏による「千代城」の存在や、石垣の多様な変遷などの多くの成果を得ることが出来ました。この結果、仙台城跡は平成15年に国史跡の指定を受け、それ以後、本丸における大広間の調査や、周辺の石垣や堀跡など各種調査の継続により、仙台城の真の姿が徐々に解明されることとなりました。

そのような中、仙台城跡を市民の憩いの場所とすることを目的として始まった青葉山公園整備事業に伴い、本丸の東側に位置する追廻地区での遺構確認調査の必要性が出てまいりました。追廻地区は仙台城築城当初から整備されたと考えられる地区で、北側の大身家臣屋敷と共に、南側には馬場など城の様々な付属施設が設置されていたことが多くの絵図から知ることが出来ます。このたびの調査は追廻地区におけるこれらの遺構確認を目的として実施したもので、加えて広瀬川に沿い本地区を囲むように構築された護岸石垣を確認することを目的としています。

3か年にわたる調査では、近世の建物跡をはじめ、石を組むなどした数多くの施設跡を確認しました。これらは予想以上に良好かつ広範囲に残っていることが判明し、さらには家臣屋敷周辺で確認した石組みがこの屋敷内の絵図に描かれた池の一部の可能性があるなど、興味ある成果を得ることができました。

最後となりましたが、調査ならびに報告書の刊行に際し、ご協力を賜りました追廻地区の方々始め、ご指導を賜りました方々に深く感謝すると共に、本報告書が研究者のみならず、市民の皆様にも広く活用されることで文化財保護の一助となれば幸いです。

平成21年3月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例 言

1. 本書は仙台市青葉区川内追廻地区に所在する仙台城跡追廻地区の遺構確認調査報告書である。
2. 発掘調査は仙台市教育委員会の指導・監督のもと、テイケイトレード株式会社が行った。
3. 本書の執筆は仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室 佐藤 淳、渡部 紀の指導のもとに下記の通り行った。
第1章第1節・・・・・・・・・・・・・・・・・・渡部 紀
第2章第2・3節、第4章・・・・・・・・・・黒田恵之
第1章2・3・4節、第2章第1・4節・・・・・・・・人口和樹
編集は大口が行った。
4. 第3章の理化学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
5. 出土した遺物の鑑定に際しては、佐藤 洋(文化財課)、高橋あけみ(仙台市教育委員会生涯学習課)、鈴木裕子(株式会社四門)の協力を得た。
6. 調査にあたり、仙台城跡調査指導委員会の岡田清一、平川 新、岡崎修子、北垣聡一郎、西 和夫、藤澤 敦各氏のほか、山田晃弘、松本秀明の両氏、追廻地区親和会の方々から御教示・御協力をいただいた。
7. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 土層注記に記載している土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：2004)に基づいた。
2. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1：10,000地形図『青葉山』を使用した。
3. 本書で使用した遺構挿入図の縮尺は、遺構全体図が1/100・1/150、断面図・個別遺構図が1/50である。
4. 本書で使用した遺物の縮尺は、陶磁器類・土器類が1/3、瓦類が1/5、金属製品・土製品類が1/2、石器類が2/3である。
5. 遺構番号は第1次から第3次調査まで確認した遺構を、種類を問わず通し番号でS○、ピットはP○と付した。
6. 出土遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下の遺物略号を付している。
B 弥生土器 C 非ロクロ土師器 D ロクロ土師器 E 須恵器 F 軒丸瓦・丸瓦
G 軒平瓦・平瓦 H その他の瓦 I 陶器・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師質土器 J 磁器
K 石器・石製品 L 木製品 N 金属製品 P 土製品

本文目次

序文

例言・凡例・本文目次

第1章 調査にいたる経緯と調査概要	第2節 第2次調査・・・・・・・・・・14
第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・1	第3節 第3次調査・・・・・・・・・・36
第2節 調査要項・・・・・・・・・・1	第4節 表面採集遺物・・・・・・・・・・45
第3節 遺跡の地理的環境と歴史的環境・・・1	第3章 理化学分析・・・・・・・・・・49
第4節 調査方法・・・・・・・・・・3	第4章 まとめ・・・・・・・・・・57
第2章 検出遺構と出土遺物	
第1節 第1次調査・・・・・・・・・・5	写真図版・・・・・・・・・・59

第1章 調査にいたる経緯と調査概要

第1節 調査にいたる経緯

仙台城跡を含む青葉山公園については、平成9年度に「青葉山公園整備計画」が策定され整備事業が進められている。平成15年に仙台城跡が史跡に指定されたことをうけ、公園整備計画の見直しが行われ、現在関係部局で調整中である。公園整備計画の中で追廻地区については、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討中である。追廻地区は国有地であるが、戦後に引揚者のための住宅が建設され現在に至っている。

追廻地区は史跡指定範囲に隣接する埋蔵文化財包蔵地であり、城郭機能時には武家屋敷や馬場などが置かれた重要な地域である。今後青葉山公園整備事業を進めるにあたり、文化財を可能な限り保護しうる計画とするためにも、事前の文化財確認調査を実施することとした。

第2節 調査要項

1. 遺跡名 仙台城跡（宮城県遺跡番号01033）
2. 調査地 仙台市青葉区川内追廻地内
3. 調査原因 青葉山公園整備事業に伴う遺構確認調査
4. 調査主体 仙台市教育委員会
5. 調査担当 仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室
主任 渡部 紀（第1～3次調査） 主任 佐藤 淳（第3次調査）
テイケイトレード株式会社
第1次調査 主任調査員 奥富雅之 調査員 森 元彦
第2次調査 主任調査員 黒田恵之 調査員 雑賀重智
第3次調査 主任調査員 黒田恵之 調査補助員 大川和樹
6. 調査期間 発掘調査 第1次調査 平成19年3月1日～平成19年3月30日
第2次調査 平成19年10月9日～平成19年12月27日
第3次調査 平成20年8月25日～平成20年10月22日
7. 調査面積 調査対象地面積 約14ha
調査面積 第1次調査 183.1㎡
第2次調査 367.0㎡
第3次調査 177.0㎡

第3節 遺跡の地理的環境と歴史的環境

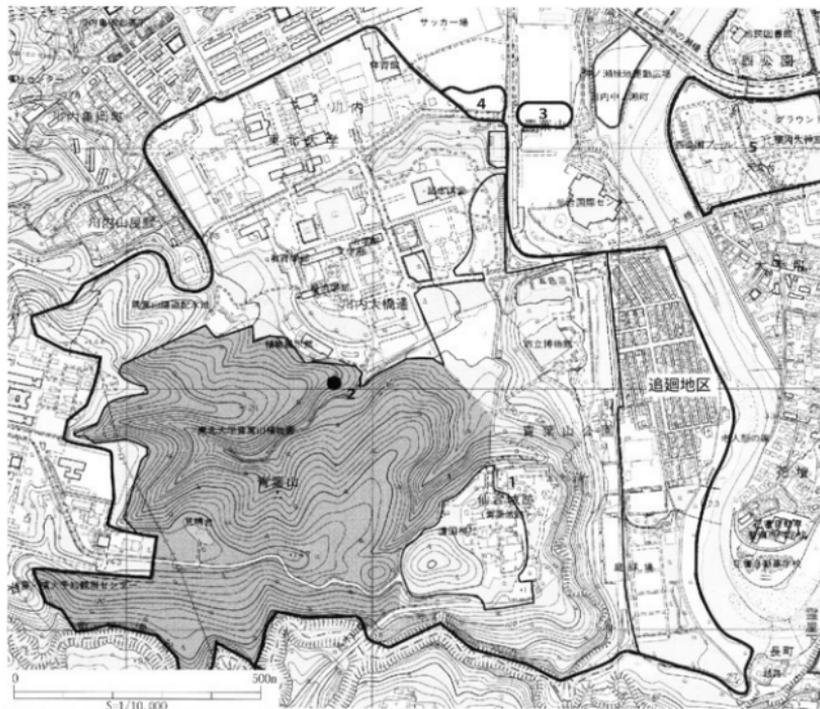
〔地理的環境〕

調査を行った川内追廻地区を含む仙台城跡は、仙台市街地の西方に位置する青葉山丘陵とその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を南流する広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流である竜の口沢の浸食により高さ70m程の断崖が形成されている。この丘陵の東端頂部に仙台城本丸跡は位置している。また本丸跡北西側麓部の仙台上町段丘面には二の丸跡、北側麓部の仙台下町段丘面には三の丸跡が位置している。今回調査を行った川内追廻地区は、本丸跡の東側河岸段丘に位置し、南及び東側に向かって緩やかに傾斜しており、現標高は28～32mである。

〔歴史的環境〕

仙台城は、初代仙台藩主 伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5（1600）年12月に城の縄張り開始され、慶長7（1602）年5月に一応の完成をみたとされている。築城当初は山上の本丸と麓の蔵屋敷を中心とするものであったが、政宗の死後、二代藩主 忠宗が山麓部に二の丸を造営し、寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心地となり、三の丸や二の丸北側及び東側の家臣屋敷地などが一体となって形成されていった。

調査を行った川内追廻地区は、「仙台城下絵図」（寛政元〔1789〕年）などの絵図によると、北側は主に家臣屋敷、南側は馬場や畑として利用されていたことが窺え、家臣屋敷部分には「片倉小十郎」の名がみられる。「伊達治家記録」によると、片倉家は延宝5（1667）年に追廻の地に屋敷替えとなっており、これ以降に作成された絵図によると、この地は明治維新に至るまで片倉家の屋敷地として利用されていたことが窺える。またこの屋敷替え以前に作成された「仙台城下絵図」（寛文8～9〔1668～1669〕年）などには、「津田玄藩」の名がみられる。また



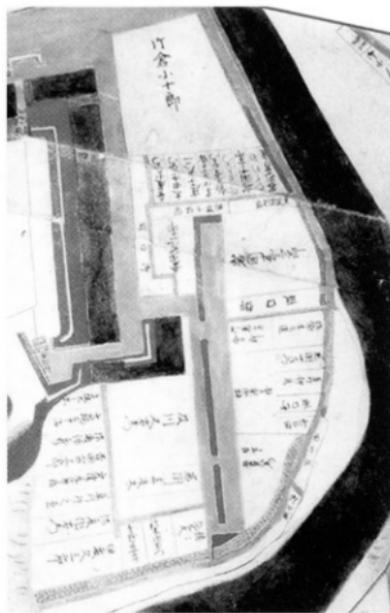
番号	遺跡番号	遺跡名	時代・備考
1	01033	仙台城跡	中世・近世（細線内は史跡指定範囲 トーンは天然記念物範囲）
2	01386	川内占碑群	弘安10（1287）年、正安4（1302）年の2基
3	01558	川内A遺跡	縄文・近世
4	01565	川内B遺跡	近世
5	01567	桜ヶ岡公園遺跡	縄文・近世

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

「仙台城下絵図」（寛文9～11〔1669～1681〕年）によると、片倉家屋敷の南側には、「白津七郎左衛門」の名がみられる。延立年間以降に作成された絵図によると、この区画は10軒に割り崩されており、御家人屋敷となっている。さらにこれよりも南側の地区には「厩」や「御馬屋」、「御口取」などの記載があり、これらは追廻地区にあった馬場やそれに付随する各種施設とみられる。

追廻地区の東側で広瀬川の西岸には長さ260mに及ぶ護岸石垣が現存している。この石垣の築造時期は不明だが、その存在は「奥州仙台城絵図」（正保2〔1645〕年頃）にも確認できることから、17世紀中頃までには築かれていたことがわかる。石垣は城の大手筋にあたる人橋の北側から南に延び、川に沿って追廻地区の南を限り、西側本丸下の山裾まで存在していたことが絵図では確認できるが、現在、地区の南側に石垣は確認できない。

近代に入り仙台城跡に第二師団が置かれると、追廻地区は射撃場や練兵場として利用されることとなる。また大正10（1921）年には下流の愛宕下発電所に導水するための隧道がこの地区に建設されるなどしたが、戦後は住宅地や公園となり、現在に至っている。



第2図 「仙台城下絵図」（寛政元〔1789〕年）
仙台市博物館所蔵

第4節 調査方法

〔トレンチの設定〕

遺構確認調査は川内追廻地区内の約14haを対象とし、広範囲における遺構の遺存状況を確認するため、地区全体に試掘トレンチを設定した。トレンチのは基本的に現況の区画に沿って配置したが、第3次調査においては想定される護岸石垣の位置に合わせて設定した。各トレンチの位置及び規模は第3図の通りである。

〔調査方法〕

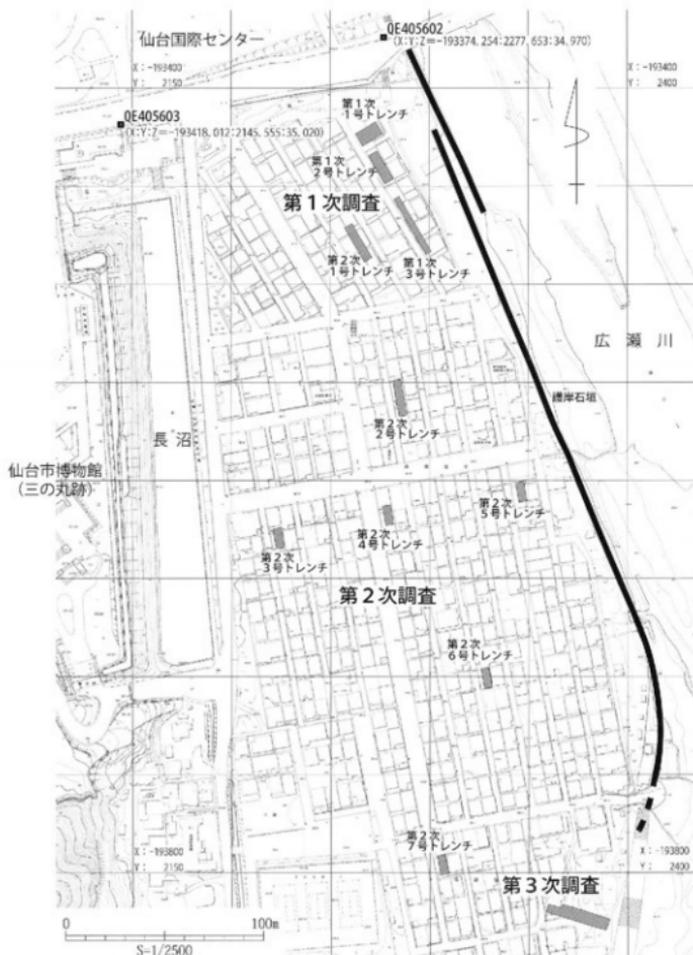
調査における平面座標基準は世界測地系平面座標第VII系を基にした。この基準及び水準は仙台市設置の公共座標（3級基準点：Q E 405602・Q E 405603 標高 35.020 m）に求め、基準点測量を行った。

遺構平面図はトータルステーションにより計測し、断面図については断面と共に標定点を写しこんだデジタル撮影画像を、正射投影画像に変換している。

写真による記録は35mmカメラを使用し、モノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用した。また高画素デジタルカメラによる通常記録に加え、デジタル測量用の撮影を行った。

当初、検出遺構については調査年次ごとに遺構番号を付したが、今回の報告書作成作業の段階で第1次調査からの通し番号に改めた。なお検出遺構については遺構一覧（第1表）を作成したが、この遺構番号については、あくまでも確認調査段階での名称であることを予め述べておく。

出土遺物の取り上げは遺構、層位ごとに行い、整理作業においては産地や器種別に分類し、数量等の集計を行った（第2・3表）。また陶磁器類の文様の実測には埋文スコープを使用した。



調査次数	トレンチ名	規模	調査面積	調査次数	トレンチ名	規模	調査面積
第1次	1号	10.0m × 6.4m	60.3㎡	第2次	4号	10.0m × 4.1m	41.0㎡
	2号	15.4m × 3.9m	60.1㎡		5号	10.0m × 4.0m	40.0㎡
	3号	31.1m × 2.0m	62.2㎡		6号	10.0m × 4.0m	40.0㎡
第2次	1号	20.0m × 4.4m	87.0㎡	7号	10.0m × 4.0m	40.0㎡	
	2号	19.0m × 4.0m	76.0㎡	第3次	30.0m × 4.0~6.0m	177.0㎡	
	3号	10.0m × 4.3m	43.0㎡				

※ 実線は護岸石垣の現存部分、破線は推定ラインである。

第3図 トレンチ配置図

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 第1次調査

1 調査経過

第1次調査地点は追廻地区の北東部に位置しており、試掘トレンチとして3か所のトレンチを現在の区画に合わせる方向に設定した。調査は近年の整地層を重機により除去した後、これより下層を人力により掘り下げ、遺構確認面での精査や遺構確認を行った。基本層序の観察は遺構確認面での記録終了後に各トレンチの長辺に沿ったサブトレンチを設定し行った。基本層序の設定に関しては、各トレンチは近接しているにも関わらず、I層以外の同一性がみられなかったことから、各トレンチ間では統一せずに個別に設定している。

検出遺構としては各トレンチより土坑や礎群があり、基本的には確認にとどめたが、サブトレンチにかかる遺構に関しては一部掘り込みを行った。なお1号トレンチからは灰白色火山灰とみられる土壌が確認されたため、分析用の試料採取を行った。10月10日には仙台成跡調査指導委員会による視察が行われた。各トレンチの調査終了時には調査面保護のため、トレンチ内に厚さ10cm程の山砂を敷き詰めた上で埋め戻しを行った。

2 1号トレンチ

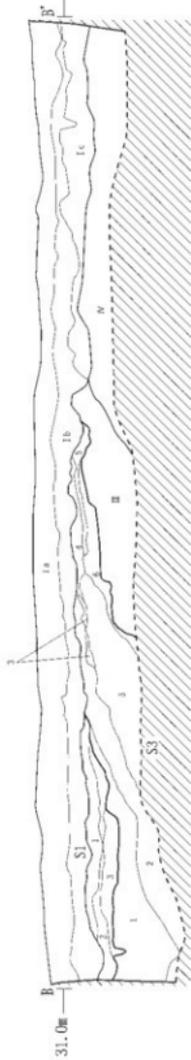
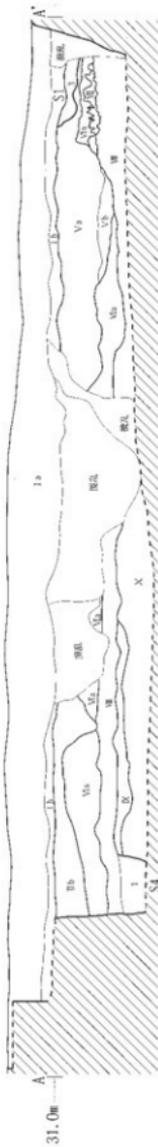
第1次調査のトレンチの中で最も北に位置する。トレンチは北東—南西方向を軸に長さ10.0m、幅6.3mの規模で設定した。また基本層序確認のため、トレンチ北壁と南壁側にサブトレンチを設定した。

(1) 基本層序

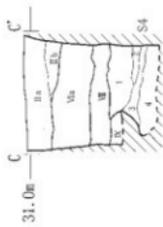
基本層序は10層に大別される。I層は追廻住宅の建設や解体に伴う整地層である。II層はトレンチ北側のみで確認し、礎と近現代の遺物を含む整地層である。III・IV層は広瀬川の氾濫起源の可能性がある層で、トレンチ南側



第4図 1号トレンチ平面図



南側サブレンチ南壁



北西サブレンチ南壁



層番号	層名	上部	下部	厚さ	特徴	説明
S4	硬質珪質土	硬質珪質土	硬質珪質土	約10cm	硬質珪質土	
1c	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
1b	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
1a	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
2c	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
2b	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
2a	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
3	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
4	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
5	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
6	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
7	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
8	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
9	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
10	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
11	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
12	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
13	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
14	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
15	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
16	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
17	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
18	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
19	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
20	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
21	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
22	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
23	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
24	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
25	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
26	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
27	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
28	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
29	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	
30	珪質土	珪質土	珪質土	約10cm	珪質土	

第5図 1号レンチ土層断面図

のみで確認した。V層は礫や炭化物を含むことから人為的堆積層と考えられ、Ⅲ・Ⅳ層の下層に入り込むように堆積している。Ⅵ～Ⅹ層は比較的安定した水平な堆積状況を見せ、自然堆積層と考えられる。Ⅶ～Ⅹ層はトレンチの北側のみで確認した。Ⅷ層中には火山灰と考えられる灰白色土が混入している。これに関しては分析の結果、十和山aテフラの降下堆積物（915年噴出）と判明している（第3章参照）。

(2) 検出遺構

遺構は3面で確認しており、1層下、Ⅲ層上面、Ⅹ層上面において土坑を各1基確認した。1層下層のS1については、出土遺物から近代以降のものとみられる。

S3 土坑 トレンチの南端に位置し、Ⅲ層上面で確認した。S1よりも古い。平面形は南・東側がトレンチ外のため全体は明らかではないが、大塚の土坑とみられる。確認した規模は東西方向の長軸が5.7m、南北方向の短軸が2.0m、深さは1.0mである。堆積土は6層に分けられ、東側に向かって傾斜し堆積している。出土遺物は近世陶磁器を主体とするが、その他に飾り金具がある。

S4 土坑 トレンチの北西端に位置し、Ⅹ層で確認した。平面形は北・西側がトレンチ外のため全体は不明だが、楕円形とみられる。北西サブトレンチ両壁の観察から、断面形はよりオーバーハングしていることがわかる。確認した規模は南北方向の長軸が1.8m、東西方向の短軸が1.2m、深さは0.5mである。堆積土は4層に分けられ、1層の1・2層はレンズ状、3・4層は水平堆積となる。出土遺物は無い。Ⅶ層より下層で検出しており、古代かそれ以前の遺構と考えられる。

(3) 出土遺物

合計123点の遺物が出土した。遺物の点数比では瓦類が最も多く、全体の49%を占める。出土層は大半が攪乱や1～Ⅱ層であり、近現代のものとみられる。

陶器

5点出土し、近世のものは2点あるが、いずれも小破片である。Ⅰ層から産地不明の蓋甕、S3から17世紀前半の美濃織部の菊皿が出土した。

磁器

30点出土し、近世のものは3点あるが、いずれも小破片である。産地は肥前のほかに不明のものがあり、器種は皿類と瓶類がある。

土師質土器

4点出土した。器種は皿類と鉢類がある。皿類はⅢ層から1点出土したが、小破片のため全体形状は不明である。鉢類は攪乱とⅢ層より上層から出土しており、近世のものかは不明である。

瓦質土器

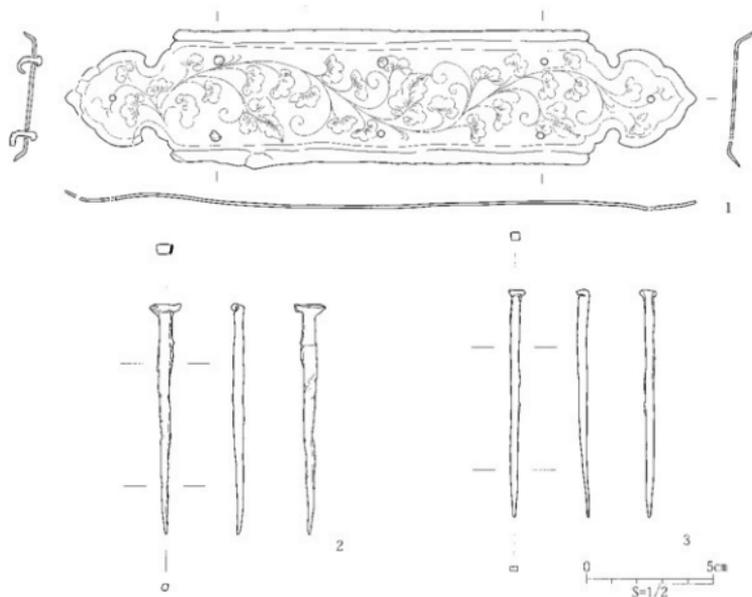
17点出土し、いずれも小破片である。器種は火鉢などの鉢類のほかに燈炉などがある。これらは全て攪乱とⅡ層から出土しており、近世のものかは不明である。

瓦類

60点出土した。このうち丸瓦15点、平瓦41点が全体の95%を占める。

金属製品

10点出土しており、多くはⅠ層中と攪乱からのものである。近世のものとしてはⅠ層中の鉄釘1点、S1の鉄釘2点（第6図2、3）と、S3の飾り金具1点（第6図1）がある。飾り金具は銅製で、唐草文が彫られている。唐草文の葉は3枚から4枚に分かれる特徴があり、削Tは丁字といえる。唐草文の特徴に加え、本来このような金具は鍍金されているものが多いが、そのような痕跡が確認できない点や表面や端部が荒れている点などから被熱している可能性があり、近世後半のものと考えられる（注1）。この他にⅠ層中より戦時中のものとみられる銃弾が1点出土した。



図録番号	図録番号	種類	原産	遺跡・部位	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考	写真番号
1	53	透彫品	銅	53-1層	78.0	5.7	1.1	109.0	透彫品 文様：唐草文 時期：近世後半 埋物の土質か？ 埋納している可能性あり。	6-1
2	53	金属製品	銅	51-3層	9.4	0.6	0.3	8.2	釘製品	6-2
3	54	金属製品	銅	51-3層	9.3	0.4	0.3	6.0	釘製品	6-3

第6図 1号トレンチ出土遺物

3 2号トレンチ

トレンチは南北方向を軸に長さ 15.4 m、幅 3.9 m の規模で設定した。また基本層序を観察するため、西壁側、南東隅、トレンチ中央に東西方向のサブトレンチを設定した。

(1) 基本層序

基本層序は 8 層に大別される。I 層は現代の整地層である。II 層はトレンチの全面で確認し、近現代の遺物を含む整地層である。III-V 層は西側のサブトレンチでは南北双方から中心部に向かって緩やかに傾斜している。また東西サブトレンチでは東側への層の傾斜を確認し、全体としてはトレンチの東辺中央部に向かって槽鉢状の落ち込みを形成している。この落ち込みについては全体を把握できないため、遺構堆積土が整地層に相当するのかは判然としない。VI 層以下はトレンチの北側と南側で様相が異なり、北側では VI 層が堆積し、下層には礫層が形成されている。VI 層は砂層を主体とし、下層の状況から広瀬川起源の自然堆積層と考えられる。しかし細かな層状の堆積がみられないことから、人為的堆積の可能性も否定できない。トレンチ南側では VII-VIII 層を確認したが、層全体としては顕著な傾斜は認められない。VIII 層からは近世の遺物が出土しており、人為的堆積と考えられる。

(2) 検出遺構

遺構は 2 面で確認しており、IV 層で礫群 1 基、V c 層で土坑 1 基を確認した。

S 7 礫群 トレンチの中央部分に位置し、IV 層中で一部を確認した。南北方向に延び、プランは東側に向かって

落ち込んでいる。確認した規模は南北方向の長軸が8.0mである。出土遺物は無く、落ち込みに伴う堆積土の一部が人為的に集積されたものかは不明である。

(3) 出土遺物

合計370点の遺物が出土した。出土層のほとんどが近現代の攪乱と1層からであり、その大半は瓦類で、全体の74%を占める。

陶器

12点出土し、近世のものは10点ある。産地は大塚相馬、唐津、美濃、志野などがあり、器種は皿類や碗類、掻鉢などがある。層位の時期を示すものではないが、サブレンチから17世紀前半の舟波の掻鉢、II層から17世紀初めの志野皿が出土した。

磁器

18点出土し、近世のものは1点ある。III層から肥前の染付皿が出土しているが、小破片のため、時期は特定できない。

土師質土器

7点出土した。器種は皿類、鉢類、焼塩壺がある。皿類は破片が多く、全体を復元できるものはVIIb層から出土した1点のみである(第9図1)。焼塩壺はVe層から17世紀代の在地産とみられるものが出土している。鉢類は攪乱からの出土であり、近世のものかは不明である。

瓦質土器

10点出土し、いずれも小破片である。器種は鉢類がある。近現代の層と考えられるII層より上層から出土したもので、時期は不明である。

瓦類

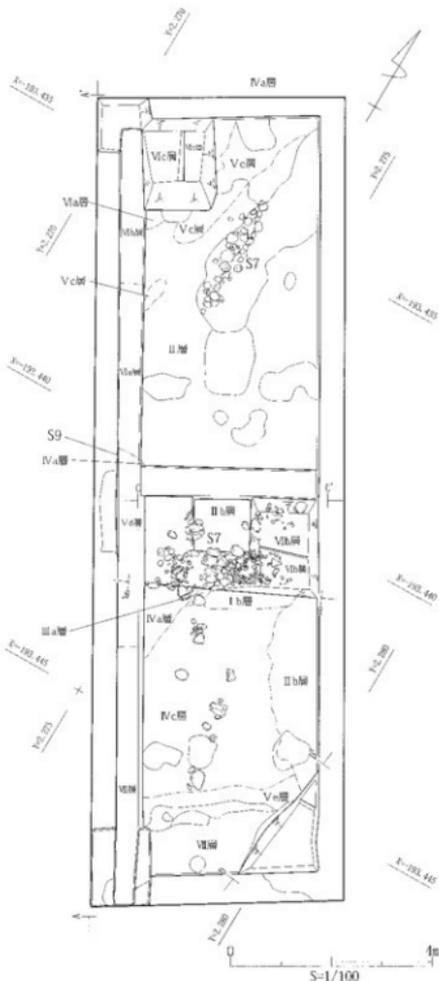
274点出土し、丸瓦の70点と平瓦の175点が全体の89%を占める。瓦類の大半は攪乱と近代以降の層からの出土である。また軒丸瓦と軒平瓦が各1点ずつ出土しているが、いずれも瓦当文様は不明である。

金属製品

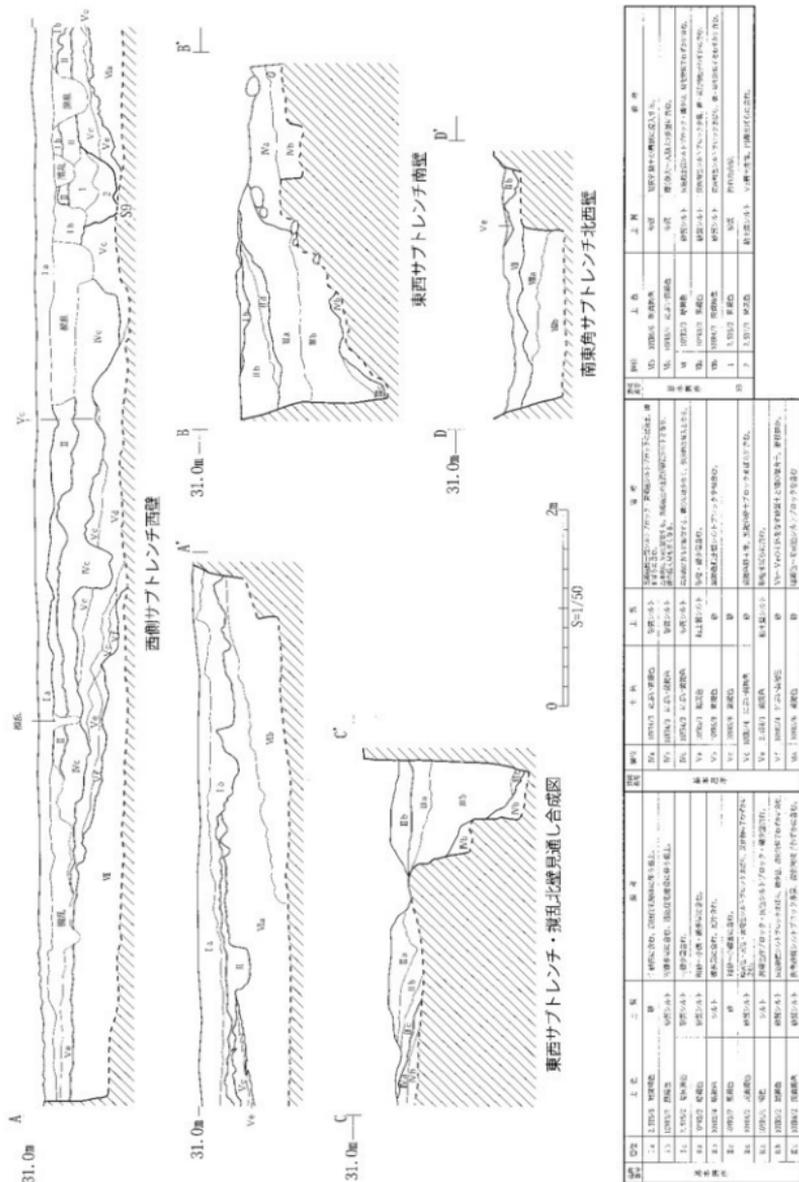
26点出土した。釘や銭貨がみられるがいずれも近現代のものである。

その他の遺物

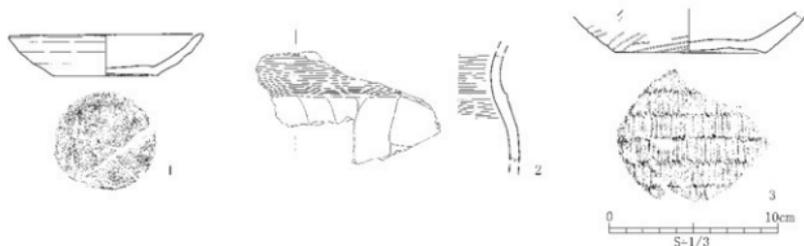
土師器がIV層から8点、V層から4点、攪乱から2点の計14点出土した。IV・V層から出土したもののうち、



第7図 2号トレンチ平面図



第8図 2号トレレンチ土層断面図



図面番号	図面参考	種類	形状	通称・用途	出土層	高さ	直径	用途	時期	備考	写真番号
1	1134	土師器土器	煎	陶器	(1-1)	6.5	2.6	佐治	近世	竹田川流域 佐野(約)稲島町境	6-4
図面番号	図面参考	種類	形状	通称・用途	出土層	高さ	直径	用途	時期	備考	写真番号
2	C3	土師器	壺	貯物	---	---	---	陶器類	近世	外題調査(1)稲島ヨコナデ、全琴ヘリナデ、内題調査(1)稲島ヨコナデ	6-5
3	C4	土師器	壺	貯物	---	---	---	陶器類	近世	外題調査(1)稲島ヨコナデ、全琴ヘリナデ、内題調査(1)稲島ヨコナデ	6-6

第9図 2号トレンチ出土遺物

10点は裏の破片である。部位の内訳としては頸部1点、胴部8点、底部1点である。このうちIV層から出土したものを図示した(第9図2、3)。これらの底部には縫(むしる)状の圧痕が認められる。また割部破片の外面には全てハケメによる調整が施されている。IV・V層出土の裏の破片10点の時期については古代の土師器と考えられるが、これ以外には小破片で摩滅が激しく、器種や時期を特定することはできない。

4 3号トレンチ

トレンチは南北方向を軸に長さ31.1m、幅2.0mの規模で設定した。また基本層序確認のため、トレンチ西壁側にサブトレンチを設定した。

(1) 基本層序

基本層序は10層に大別される。I層は現代の整地層である。II・III層は整地層で、ほぼ水平に堆積しており、近現代の遺物を含んでいる。IV層は埋め戻し層とみられ、a・b層に細分され、IVa層はS5上面、IVb層はS2とS5上面にかけて堆積している。IV層からは19世紀前半の遺物が出土している。V～X層は自然堆積層とみられ、V～VII層はトレンチの南側で、IX・X層はトレンチの北端部分で確認した。

(2) 検出遺構

遺構は6面で確認しており、II層でピット1基、III層で十坑1基、ピット12基、IV層で焼面1基、V層で十坑1基、VI層で十坑1基、ピット1基、IX層でピット1基を確認した。ピットのうちII層のP2、III層のP3・6・7は底面に石が置かれており、礎石を伴う柱穴と考えられ、この地区に建物の存在が想定される。

S2 土坑 トレンチ中央より南側に位置し、V層で確認した。サブトレンチで一部を確認したのみで、全体は明らかではない。確認できた規模は南北方向の長軸が12.0m、深さは0.5mである。堆積土は7層に大別される。

1層はa・b層に細分され、上層の1a層はシルブロックや礫が混入する砂質土で、人為的な埋め戻し層と考えられる。その下層にはS5を覆う埋め戻し層であるIVb層が入り込んでいる。下層の2～7層はレンズ状の堆積の自然堆積と考えられる。出土遺物は1層中から瓦類が多数ある。

S5 土坑 トレンチ中央より北側に位置し、VI層で確認した。サブトレンチで一部を確認したのみで、全体は明らかではない。確認できた規模は南北方向の長軸が14.6m、深さは0.5mである。堆積土は4層に分けられる。4層は混入物を含まないに白い黄褐色砂と小礫を含む暗褐色砂が、細い互層となり堆積している。出土遺物は瓦類を主体とし、ほかに19世紀前半の陶磁器類がある。

(3) 出土遺物

合計 423 点の遺物が出土した。出土遺物の大半は瓦類で、全体の 79% を占める。IV 層と S 5 からは 19 世紀前半代の遺物が多く出土している。

陶器

26 点出土し、近世のものは 24 点とほとんどを占めるが小破片が多い。産地は大塚相馬が多く、全体の 37% を占め、その他には堤、肥前、唐津、美濃などがある。器種は碗類が多く、37% を占め、他に鉢類、摺鉢、土瓶などある。IV 層からは 19 世紀前半の鉄軸摺鉢や大塚相馬の青釉土瓶があり、S 5 からは 19 世紀前半の大塚相馬の豆甕などが出土した。

磁器

30 点出土し、近世のものは 25 点で小破片が多い。産地は肥前が圧倒的に多く、全体の 92% を占める。この他に瀬戸美濃、中国などがみられる。器種は皿類が 36%、碗類が 32% を占める。この他の器種には段重や猪口がみられる。IV 層からは 19 世紀代の肥前の染付段重が、S 5 からは 19 世紀中葉の肥前の染付皿、瀬戸美濃の製品が出土した。この他には S 5 から 16 世紀末から 17 世紀前半に位置づけられる中国の青花皿が出土している。

土師質土器

7 点出土し、器種は皿類と鉢類がある。皿類は小破片が多く、全体を復元できたのは S 5 から出土した 1 点のみである(第 12 図 1)。鉢類は視乱からの出土であり、時期は不明である。

瓦質土器

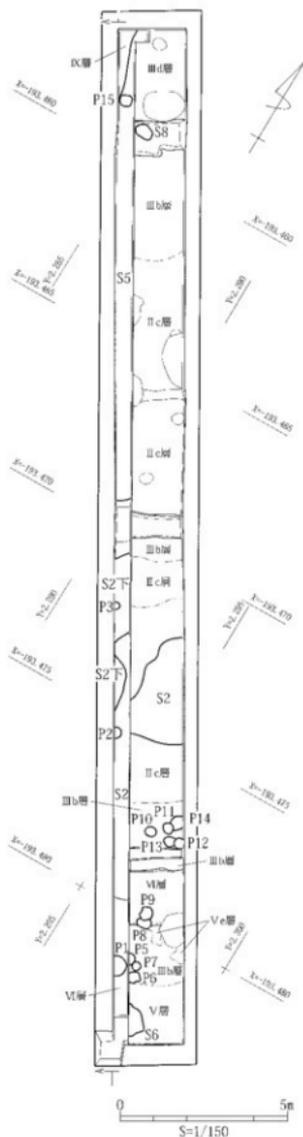
3 点出土し、器種は鉢類がある。IV 層から出土したもの以外は時期不明である。

瓦類

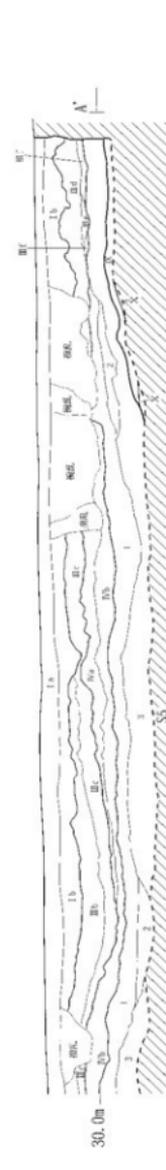
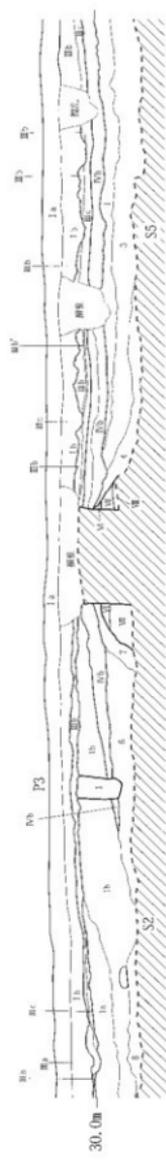
335 点出土した。出土地別にみると、IV 層・S 2・S 5 から多く出土している。種類別では丸瓦 87 点、平瓦 188 点が全体の 82% を占める。その他の種類としては軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、伏間瓦がみられる。軒丸瓦は 7 点出土し、瓦当文様の判別可能なものは 4 点あり、このうち 2 点を図示した。瓦当文様は珠文・三巴文 3 点、九曜文 1 点である。珠文・三巴文には右巻と左巻のものがあり、右巻は I 層と S 5 (第 12 図 2) から 1 点ずつ、左巻は S 5 から 1 点出土した(第 12 図 3)。軒平瓦は 2 点出土したが、いずれも瓦当文様は不明である。また軒棧瓦は 1 点出土しており、瓦当文様は左巻の三巴文である。

金属製品

19 点出土した。種別は釘、銭貨がある。釘はⅤ層と S 5 から出

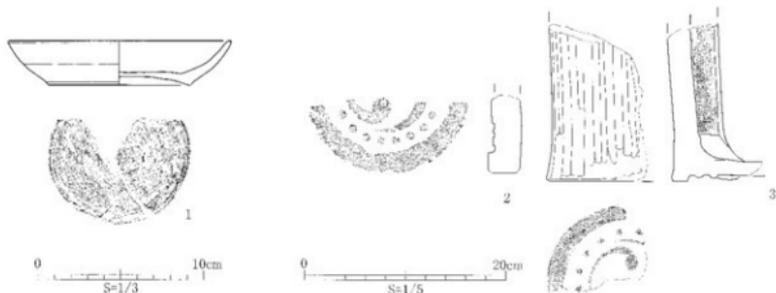


第 10 図 3号トレンチ平面図



階層	土質	層厚										
1	1.1 表層土	0.5	1.2 表層土	0.5	1.3 表層土	0.5	1.4 表層土	0.5	1.5 表層土	0.5	1.6 表層土	0.5
2	2.1 表層土	0.5	2.2 表層土	0.5	2.3 表層土	0.5	2.4 表層土	0.5	2.5 表層土	0.5	2.6 表層土	0.5
3	3.1 表層土	0.5	3.2 表層土	0.5	3.3 表層土	0.5	3.4 表層土	0.5	3.5 表層土	0.5	3.6 表層土	0.5
4	4.1 表層土	0.5	4.2 表層土	0.5	4.3 表層土	0.5	4.4 表層土	0.5	4.5 表層土	0.5	4.6 表層土	0.5
5	5.1 表層土	0.5	5.2 表層土	0.5	5.3 表層土	0.5	5.4 表層土	0.5	5.5 表層土	0.5	5.6 表層土	0.5
6	6.1 表層土	0.5	6.2 表層土	0.5	6.3 表層土	0.5	6.4 表層土	0.5	6.5 表層土	0.5	6.6 表層土	0.5
7	7.1 表層土	0.5	7.2 表層土	0.5	7.3 表層土	0.5	7.4 表層土	0.5	7.5 表層土	0.5	7.6 表層土	0.5
8	8.1 表層土	0.5	8.2 表層土	0.5	8.3 表層土	0.5	8.4 表層土	0.5	8.5 表層土	0.5	8.6 表層土	0.5
9	9.1 表層土	0.5	9.2 表層土	0.5	9.3 表層土	0.5	9.4 表層土	0.5	9.5 表層土	0.5	9.6 表層土	0.5
10	10.1 表層土	0.5	10.2 表層土	0.5	10.3 表層土	0.5	10.4 表層土	0.5	10.5 表層土	0.5	10.6 表層土	0.5
11	11.1 表層土	0.5	11.2 表層土	0.5	11.3 表層土	0.5	11.4 表層土	0.5	11.5 表層土	0.5	11.6 表層土	0.5
12	12.1 表層土	0.5	12.2 表層土	0.5	12.3 表層土	0.5	12.4 表層土	0.5	12.5 表層土	0.5	12.6 表層土	0.5
13	13.1 表層土	0.5	13.2 表層土	0.5	13.3 表層土	0.5	13.4 表層土	0.5	13.5 表層土	0.5	13.6 表層土	0.5
14	14.1 表層土	0.5	14.2 表層土	0.5	14.3 表層土	0.5	14.4 表層土	0.5	14.5 表層土	0.5	14.6 表層土	0.5
15	15.1 表層土	0.5	15.2 表層土	0.5	15.3 表層土	0.5	15.4 表層土	0.5	15.5 表層土	0.5	15.6 表層土	0.5
16	16.1 表層土	0.5	16.2 表層土	0.5	16.3 表層土	0.5	16.4 表層土	0.5	16.5 表層土	0.5	16.6 表層土	0.5
17	17.1 表層土	0.5	17.2 表層土	0.5	17.3 表層土	0.5	17.4 表層土	0.5	17.5 表層土	0.5	17.6 表層土	0.5
18	18.1 表層土	0.5	18.2 表層土	0.5	18.3 表層土	0.5	18.4 表層土	0.5	18.5 表層土	0.5	18.6 表層土	0.5
19	19.1 表層土	0.5	19.2 表層土	0.5	19.3 表層土	0.5	19.4 表層土	0.5	19.5 表層土	0.5	19.6 表層土	0.5
20	20.1 表層土	0.5	20.2 表層土	0.5	20.3 表層土	0.5	20.4 表層土	0.5	20.5 表層土	0.5	20.6 表層土	0.5
21	21.1 表層土	0.5	21.2 表層土	0.5	21.3 表層土	0.5	21.4 表層土	0.5	21.5 表層土	0.5	21.6 表層土	0.5
22	22.1 表層土	0.5	22.2 表層土	0.5	22.3 表層土	0.5	22.4 表層土	0.5	22.5 表層土	0.5	22.6 表層土	0.5
23	23.1 表層土	0.5	23.2 表層土	0.5	23.3 表層土	0.5	23.4 表層土	0.5	23.5 表層土	0.5	23.6 表層土	0.5
24	24.1 表層土	0.5	24.2 表層土	0.5	24.3 表層土	0.5	24.4 表層土	0.5	24.5 表層土	0.5	24.6 表層土	0.5
25	25.1 表層土	0.5	25.2 表層土	0.5	25.3 表層土	0.5	25.4 表層土	0.5	25.5 表層土	0.5	25.6 表層土	0.5
26	26.1 表層土	0.5	26.2 表層土	0.5	26.3 表層土	0.5	26.4 表層土	0.5	26.5 表層土	0.5	26.6 表層土	0.5
27	27.1 表層土	0.5	27.2 表層土	0.5	27.3 表層土	0.5	27.4 表層土	0.5	27.5 表層土	0.5	27.6 表層土	0.5
28	28.1 表層土	0.5	28.2 表層土	0.5	28.3 表層土	0.5	28.4 表層土	0.5	28.5 表層土	0.5	28.6 表層土	0.5
29	29.1 表層土	0.5	29.2 表層土	0.5	29.3 表層土	0.5	29.4 表層土	0.5	29.5 表層土	0.5	29.6 表層土	0.5
30	30.1 表層土	0.5	30.2 表層土	0.5	30.3 表層土	0.5	30.4 表層土	0.5	30.5 表層土	0.5	30.6 表層土	0.5

第11図 3号レンチ西側サブレンチ西壁土層断面図



図面番号	登録番号	種類	素材	図様・形状	寸法	重量	産地	時期	産所	写真番号	
1	F-35	土師器土器	MI	S 5-3 型	(13.3)	8.5	2.6	古墳	近江	古岡稲米塚一ツツ	6-7

図面番号	登録番号	種類	図様・形状	文様	長さ (cm)	全長 (cm)			幅 (cm)	重量 (g)	備考	写真番号
						全長	口内径	口外径				
2	F-1	野丸瓦	1層	縁文三出文	—	(16.0)	(11.8)	2.1	0.7	0.46	瓦当部：縁文巻・溝敷不明・縁部0.8cm	6-8
3	F-3	野丸瓦	S 5-4 型	縁文三出文	—	(14.4)	(11.4)	2.5	0.6	0.73	瓦当部：縁文巻・溝敷不明・縁部0.8cm 凸出：ナデ 内径：布正	6-9

第12図 3号トレンチ出土遺物

上しており、いずれも角釘である。銭貨はⅠ・Ⅱ層より近現代のものが出土した。

石製品

Ⅳ層から硯の破片が1点出土した。

その他の遺物

攪乱とⅢ層から土師器が1点ずつ出土した。攪乱出土のものは表の胴部破片で、古代のものとみられ、Ⅲ層出土のものは摩滅が激しく時期、器種を特定できない。

(注1) 高橋あけみ氏による。

第2節 第2次調査

1 調査経過

第2次調査は追廻地区に試掘トレンチとして7か所のトレンチを設定して行った。調査は近年の整地層を重機で除去した後、これより下層は人力により掘り下げ、遺構確認面での精査や遺構確認を行った。基本層序の観察は遺構確認面の記録後に各トレンチにおいてサブトレンチを設定し行った。基本層序の設定に関しては、トレンチ間の距離が離れているため、各トレンチでは統一せず個別に設定している。

検出遺構には池跡や溝跡、石組遺構などがあり、基本的には確認にとどめたが、サブトレンチにかかるものについては遺構の性格を判断のため一部掘り込んだ。1号トレンチの弥生土器が出土したXV層、5号トレンチのS88溝跡については分析用の試料採取を行った。埋め戻しはトレンチ全体を保護するため、発生土のうち混入物の少ない土を厚さ10cmほど敷き詰めてから行った。また1号トレンチのS18・S19については遺構保護のため、上面に山砂を敷き詰めた。

2 1号トレンチ

追廻地区の北側に位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ20.0m、幅4.0mの規模で設定した。またトレンチの西壁側に沿ってサブトレンチを設定し、またトレンチ北側と南側の攪乱を利用し、サブトレンチにより東西

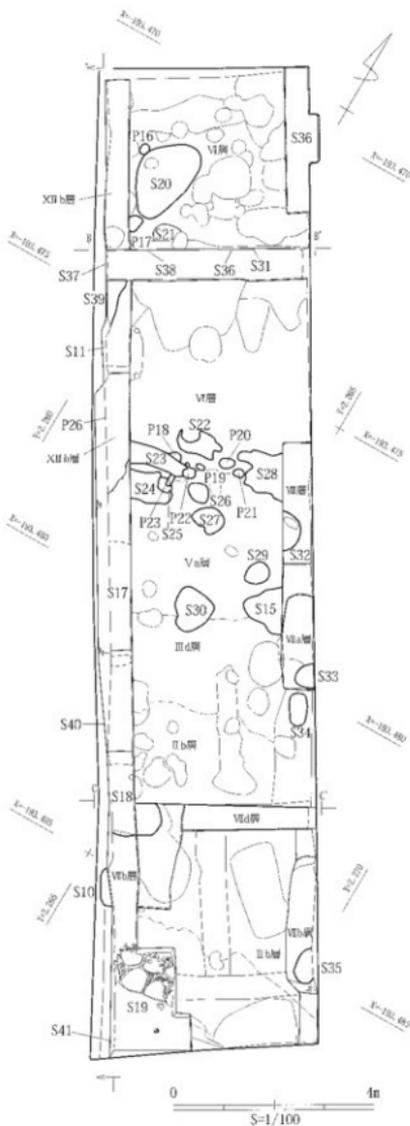
方向の堆積状況についても確認した。

(1) 基本層序

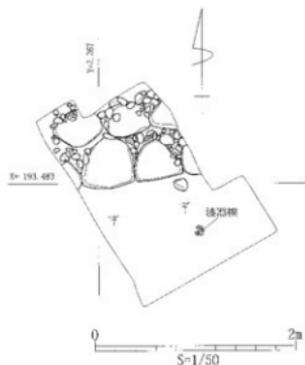
基本層序は17層に大別される。I層は追廻住宅の建設や解体に伴う現代の整地層である。I層以下は南側へ向かって傾斜する落ち込みを確認しており、これを境にトレンチ中央より北側と南側で堆積土の様相が異なる。南側では落ち込みを埋めた整地層であるII～V・VII・X層を確認し、中でもII層は近現代の遺物を含む層である。III～V・X層は南側に傾斜している。北側ではVI・VII・IX・XI層のほぼ水平に堆積する整地層を確認した。IX層は層厚5cmの薄い層で、炭化物を多量に含んでいる。XII～XVIII層は自然堆積層である。XII層は灰色シルトを主体とし、上面は南側へ緩く傾斜し、トレンチ中央付近から大きく落ち込むと考えられる。トレンチ南側ではこの層の堆積は認められない。XV層はa～cの3層に細分でき、XVa層からは弥生時代中期の土器片が出土した。XV層については土壌の性質を調べるため理化学分析を行っている(第3章参照)。

(2) 検出遺構

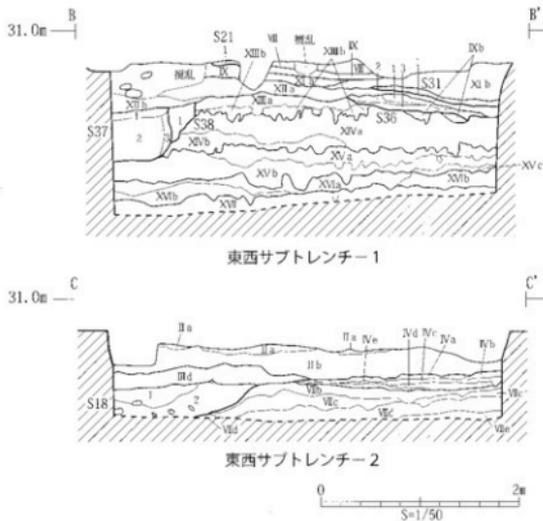
遺構は11面で確認しており、IIa層で硬化面の広がり5ヶ所、土坑2基、IIb層上面で土坑1基、IIIa層上面で土坑1基、Va層上面で土坑7基、ビット9基、VI層上面で土坑5基、VIIa層上面で土坑5基、VIIb層上面で池跡1基、VIII層上面で土坑1基、X層上



第13図 1号トレンチ平面図



第14図 S19平面図



第16図 1号トレンチ東西サブトレンチ1・2北壁土層断面図

北側には石が階段状に2段組まれていた。石組みは長さ0.5m、幅0.4m程度の平坦な川原石で構築され、南側に小口面を向け、背面には径約5cmの裏込石を充填している。堆積土は5層に分けられ、1～3層は池跡の埋土層である。4層は黒色シルトを主体とし、石組みの上面を覆っている。土質は締りが無いことから、水が滲んでいる状態で堆積したものと考えられる。5層は裏込めを覆う整地土で灰色シルトを主体とし、炭化物を含んでいる。出土遺物は17世紀後半から18世紀前半の陶磁器類や古銭、漆器碗がある。

S 36 土坑 トレンチの北東に位置し、XIII a層上面で確認した。北西サブトレンチ1の北面で断面のみを確認したが、平面形は不明である。確認した規模は東西方向に1.5m、深さ0.3mで、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、最下層の3層は灰色シルトを主体とし、締りは弱い。出土遺物は近世陶磁器類の他に獣骨などがある。

(3) 出土遺物

合計894点の遺物が出土した。瓦類の比率が高く全体の52%を占める。

陶器

67点出土し、近世のものは40点ある。産地は瀬戸及び美濃が最も多く全体の55%を占める。この他に肥前、唐津、丹波、岸などがあるが、本地区においては大塚相馬、小野相馬の製品のみみられない。器種は皿類が多く全体の38%を占め、この他に鉢類（播鉢を含む）、碗類などがある。I b層から16世紀末から17世紀初頭の唐津の鉄軸皿（第17図1）、IV層から17世紀後半の瀬戸美濃の鉄軸播鉢（第17図2）が出土した。

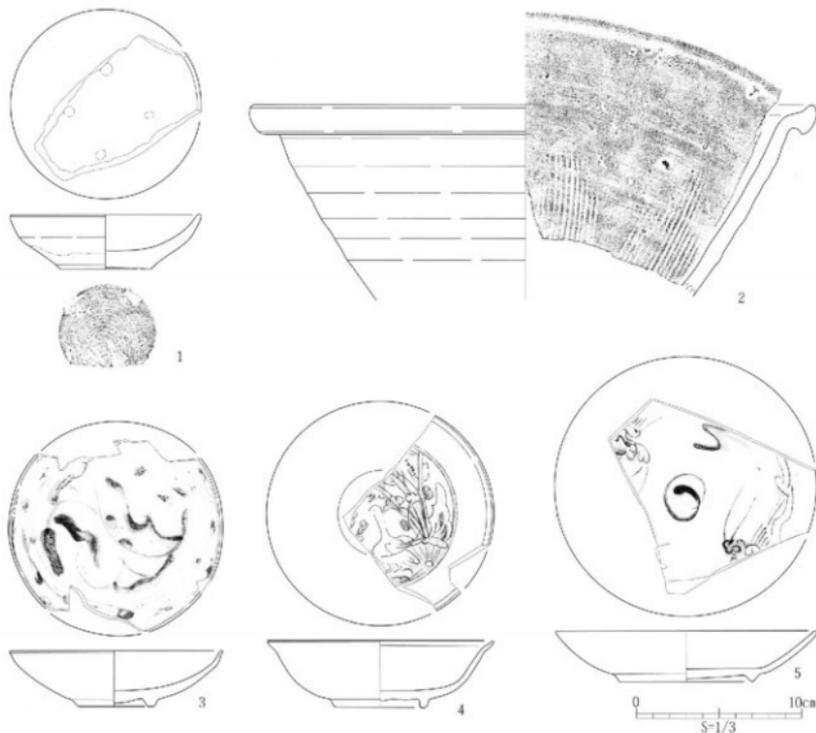
磁器

111点出土し、近世のものは47点ある。産地は肥前が圧倒的に多く全体の85%を占める。この他に波佐見、瀬戸美濃、中国がある。器種は皿類が最も多く45%を占め、この他に碗類、鉢類などがある。S 19から17世紀中頃の肥前の染付唐草文端反皿（第17図3）、S 36から17世紀中頃の肥前の染付水禽文端反皿（第17図4）、

面で土坑1基、X I層上面で土坑2基、XIII層上面で土坑1基を確認した。またXV層中からは弥生時代中期の甕形土器片、石皿の破片が出土したが、この時期の遺構は確認できなかった。

S 17 礎群 トレンチの中央付近に位置し、X層上面が南側に傾斜する落ち込みに凹礎が集積する状況を確認した。これらの礎群が自然堆積層の一部か、あるいは人為的に集積されたものかは不明である。出土遺物は無かった。

S 19 池跡 トレンチの南西隅に位置し、VII b層上面で確認した。東・西・南側がトレンチ外のため、平面形は不明である。確認した規模は南北方向の長軸が2.2m、東西方向の短軸が1.6m、深さは0.5mである。



発掘番号	器物番号	種類	器種	器体-器口	高 (cm)			口径	時期	備考	写真番号
					上腹	口縁	器底				
1	120	陶器	皿	1/8脚	11.5	5.6	3.4	8.5	17c前半	13ヶ所陶器 敷島 遺跡(石原地区牧野 尾山・蔵家・島上)出土4點中	7-1
2	125	陶器	鉢	1/8脚	10.6	—	—	—	17c後半	2ヶ所 遺跡(112本(50cm) 室5小形)	7-2
3	135	陶器	碗	S19	13.1	4.7	3.4	8.0	17c中頃	1ヶ所 遺跡(112本(50cm) 室5小形)	7-3
4	140	陶器	碗	S20	13.8	5.1	4.1	8.0	17c中頃	1ヶ所 遺跡(112本(50cm) 室5小形)	7-4
5	141	陶器	皿	S36	15.8	8.1	3.1	8.0	17c前半	青瓦 内輪 敷島 遺跡(112本(50cm) 室5小形)	7-5

第17図 1号トレンチ出土遺物(1)

17世紀前半の中国瀋州窯系の青花皿(第17図5)が出土した。

土師質土器

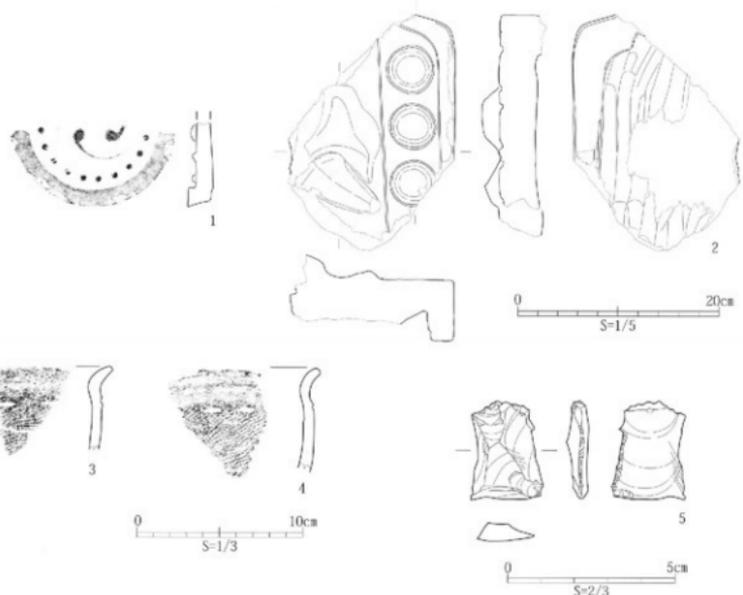
117点出土した。器種は皿類が多く53%を占める。この他に焼塩壺・鉢類がある。皿類は全て小破片で詳細は不明である。焼塩壺はII層から1点、S19から4点の計5点が出土した。S19からは在地産の焼塩壺の他に、小破片だが手捏ねの焼塩壺とその蓋の可能性のあるものが出土した。この製品については大坂方面からの搬入品の可能性がある(注2)。鉢類の多くは攪乱及びI層から出土しており時期は不明である。

瓦質土器

29点出土した。器種は鉢類、手焙り、香炉、坩堝などがある。

瓦類

473点出土し、丸瓦63点、平瓦334点が全体の84%を占める。攪乱からは全体の25%、V層からは全体の



発掘番号	登録番号	種別	遺物・部位	文様	寸法(cm)			重量(g)	備考	写真番号
					長さ	幅	厚さ			
1	B 5	埴丸瓦	胎土	珠文・三巴文	—	—	—	3.4	瓦当部：三巴文・珠文不明・直径1.5cm	7-6
2	H 4	陶器	甕	—	—	—	—	—	—	7-7
3	B 6	埴土片	漆	XVa型	—	—	—	—	—	7-8
4	B 7	埴土片	漆	XVa型	—	—	—	—	—	7-9
5	K 1	灰石部	不明	S19	3.6	3.9	6.7	48	石材：珪質灰岩 二次加工あり	7-10

第18図 1号トレンチ出土遺物(2)

21%が出土した。軒丸瓦は2点出土し、I層出土のものは文様が不明で、III d層出土のものは左巻の珠文三巴文である(第18図1)。その他には掘乱から鬼瓦が1点出土した(第18図2)。

金属製品

45点出土した。多くは掘乱とI層からの出土である。種別は釘、古銭、煙管などがある。釘は27点出土した。このうちV層から出土した2点は角釘で、これ以外は丸釘である。古銭はS 19から3点出土し、2点は古寛永、1点は不明である。煙管はS 19から雁首部が、掘乱からはほぼ完形のものが出土した。掘乱出土のものは近現代の製品と考えられる。

木製品

4点出土した。種別は漆器と木板がある。漆器はS 19から出土しており、朱漆であるが漆膜部分が遺存しているのみである。器種は椀類で蓋の可能性もある。木板はS 19と近現代の遺構であるS 10から出土した。用途に関しては不明である。

石製品

S 19から基石2点と甕の破片1点の計3点が出土した。

その他の遺物

弥生土器10点、土師器4点、石器1点、石皿1点が出土した。弥生土器は全てXV a層から出土している。器種は甕形土器で、口縁部片2点を図示した(第18図3、4)。時期は弥生中期で型式は樽形皿式とみられる。土師器はS 19出土の1点以外は時期、器種が不明である。S 19出土のものは栗田式の甕の胴部破片である。石器はS 19から出土しており、二次加工のある剥片である(第18図5)。石皿はXV a層から出土した。

3 2号トレンチ

追廻地区の中央やや北寄りに位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ18.4m、幅4.0mの規模で設定した。東壁側に沿ってサブトレンチを設定した他、トレンチ中央の攪乱を利用して下層の確認を行い、北側で自然堆積層である灰白色シルト層を確認した。

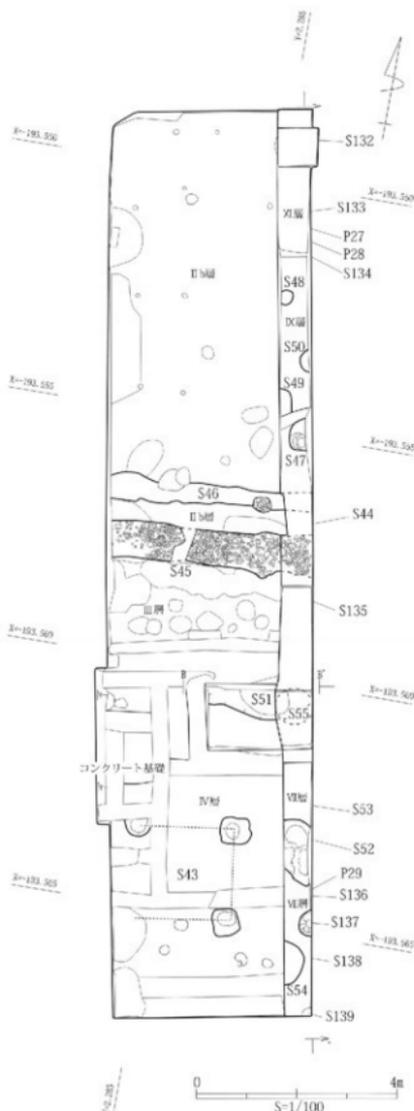
(1) 基本層序

基本層序は11層に大別される。I層は現代の整地層である。II~IX層は遺物や炭化物を含むことから人為的な堆積と考えられる。II層以下はトレンチの中央付近を境に北側と南側で様相が異なっており、北側ではIII・V・VIII・IX層を確認した。VIII層は南側に向かって緩やかに傾斜しており、V層はこの落ち込みの中に堆積している。トレンチ南側ではIV・VI・VII層を確認し、X層・XI層がほぼ水平に堆積している。XI層は灰色シルトを主体とし、1号トレンチのXII層に類似しており、広範囲に堆積する自然堆積層と考えられる。

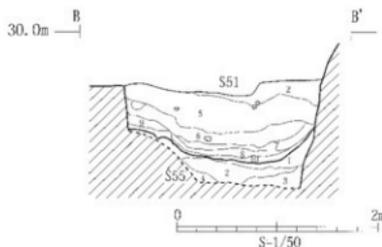
(2) 検出遺構

遺構は7面で確認しており、II a層上面で硬化面の広がりや1か所、建物跡1棟、II b層上面で溝跡3条、土坑5基、III層上面で土坑1基、ピット2基、IV層上面で土坑2基、ピット1基、VI層上面で土坑3基、井戸1基、VII層上面で土坑1基、ピット1基、IX層上面で土坑3基を確認した。

S 43 建物跡 トレンチの南側に位置し、II a層上



第19図 2号トレンチ平面図



第21図 2号トレンチ中央
サブトレンチ北壁土層断面図

面で確認した。3基の礎石を確認し、南北方向ではN-8°-Wの軸に並んでいる。東西方向に並ぶP1-P2間で1.8m、南北方向に並ぶP2-P3間で1.9mであり、ほぼ1間(約1.8m)の等間隔である。礎石の掘り方形状は方形で、規模は幅0.6m、深さ0.2mである。底面はほぼ平坦で、径約0.3mの礎盤石が設置されていた。堆積土は灰褐色シルトを主体とする。S43-P3東側の約1.7mに位置するS137については、底面に径約8cmの円礫が充填されており、構造は異なるが、同一の建物跡を構成する可能性がある。出土遺物は無かった。

S45 溝跡 トレンチの中央付近に位置し、IIb層上面で確認した。S44より古い。主軸方向はE-5°-Nである。確認した規模は南北方向の長軸が3.8m、東西方向の短軸が上端幅0.7~0.9m、下端幅0.6m、深さは0.2mで、断面形は逆台形である。溝跡の内部には径5~20cmの円礫を充填している。堆積土は2層に分けられ、1層は褐色砂質シルト、2層は灰褐色シルトを主体とする掘り方の堆積土である。出土遺物は無かった。本遺構は仙台城二の丸で確認した土蔵の基礎との類似性があり、当初は暗渠として利用したものを、後に土蔵の基礎に転用した可能性がある(注3)。

S46 溝跡 トレンチの中央付近に位置し、IIb層上面で確認した。S44よりも古く、S45の0.5m北側に平行して位置している。確認した規模は南北方向の長軸が3.8m、東西方向の短軸が上端幅0.6m、下端幅0.5m、深さ0.1mである。断面形は箱形で、厚さ0.5cmの木桶側板の痕跡が確認できた。堆積土は3層に分けられ、2層は木桶内部の堆積土で、褐色粘土を主体とする。3層は木桶の掘り方で、褐色シルトを主体とする。出土遺物は近世の陶磁器類が少量ある。検出状況からみてS45とほぼ同時期に存在していたと考えられる。

S51 土坑 トレンチの中央付近に位置し、IV層上面で確認した。S55より新しい。平面形は掘り込みの一部を確認したのみであるが本来は円形と考えられる。確認した規模は東西方向に2.0m、南北方向に2.0m、深さ0.9mである。断面形は逆台形で、底面はやや丸みを帯びている。堆積土は10層に分けられ、最下層の10層はマンガン化が進んだ黒色粘土質シルトを主体としている。出土遺物は無かった。

(3) 出土遺物

合計664点の遺物が出土した。全体的に小破片が多く、遺存度は低い。

陶器

134点出土し、近世のものは91点ある。産地は大塚相馬が多く全体の36%を占める。この他に肥前、小野相馬、瀬戸美濃などがある。器種は碗類が全体の35%を占め、この他に皿類、鉢類などがある。S52より18世紀後半の大塚相馬の白濁釉胎軸流し碗(第22図1)が出土しており、口縁部には打ち欠いたような痕跡がみられる。

軟質施軸陶器

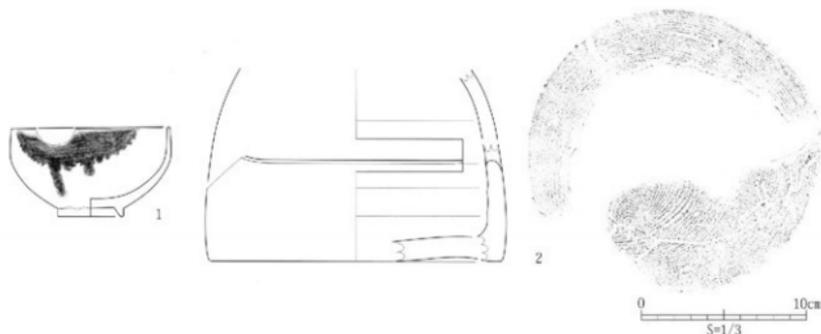
4点出土した。全て近現代の遺物を含むII層と攪乱から出土している。埴の焙烙がある。

磁器

286点出土し、近世のものが66点ある。産地は肥前が圧倒的に多く全体の91%を占める。この他に波佐見、瀬戸美濃などがある。器種では碗類と皿類が多くそれぞれ27%を占め、この他に鉢類、瓶類などがある。

土師質土器

43点出土した。器種は皿類が多く47%を占め、この他には鉢類がある。皿類の多くは小破片で、全体を復元できたものはS52出土の1点のみで、小型の製品で口径は5.5cmである。鉢類には近現代の植木鉢も含まれる。



図録番号	登録番号	材質	器種	直径・厚さ	寸法 (cm)			産地	時期	備考	写真番号
					口径	高さ	底径				
1	130	陶器	碗	5.5	9.6	4	5.5	大塚地区	古・畿中	施文：白点施・彫刺文施 口縁部：打毛欠?	B-1
2	128	瓦質土器	手焙り	5.5	—	18.0	—	右津	古世	施文：右面施刺文 裏の裏：磨り毛?	B-2

第22図 2号トレンチ出土遺物

瓦質土器

38点出土した。器種は鉢類、手焙りがある。S 55から出土した手焙りを図示した(第22図2)。

瓦類

42点出土し、丸瓦8点、平瓦23点が全体の73%を占める。攪乱から軒丸瓦1点が出土したが、瓦当部分の小破片のため文様は不明である。

土製品

2点出土した。Ⅱ層、Ⅳ層から出土しており、共に型押し人形の破片である。

金属製品

60点出土した。多くは攪乱とⅠ～Ⅲ層からの出土である。種別は釘・煙管がある。釘は39点出土している。このうちⅣ層とS 44・S 46・S 53から出土した18点は全て角釘で、これ以外は近現代の丸釘である。煙管は攪乱から1点出土し、吸口部分の遺存である。

石製品

3点出土した。種別は硯、砥石である。硯は攪乱とⅠ層から、砥石はS 55から出土している。

その他の遺物

土師器15点、須臾器2点、中世陶器2点が出土した。土師器はⅢ層から古代とみられる裏と底部に糸切痕のある坏が出土した。これ以外、時期や器種を特定できるものは無かった。須臾器はⅢ層より平安時代の瓶類が出土した。中世陶器はⅢ層より13世紀後半から14世紀前半の白石窯系の壺ないし瓶の体部破片と産地・器種不明の破片が出土した。

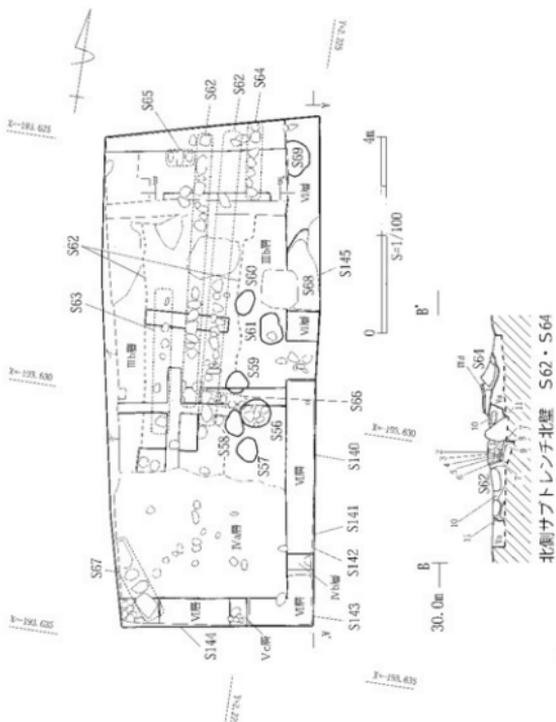
4 3号トレンチ

追廻地区の中央付近で、現在の長沼から約40m東側に位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ10.0m、幅4.0mの規模で設定した。またトレンチの東壁側に沿ってサブトレンチを設定した。

(1) 基本層序

基本層序は6層に大別される。Ⅰ層は現代の整地層である。トレンチの北側は攪乱によりⅢb層上面からⅤb層中まで攪乱されている。Ⅱ～Ⅴ層は出土遺物や混入物から人為的堆積と考えられる。最下層のⅥ層は、灰白色砂を

図号	内容	寸法	手続	備考
1	基礎	1000	基礎	基礎
2	1階床	1000	1階床	1階床
3	2階床	1000	2階床	2階床
4	3階床	1000	3階床	3階床
5	4階床	1000	4階床	4階床
6	5階床	1000	5階床	5階床
7	6階床	1000	6階床	6階床
8	7階床	1000	7階床	7階床
9	8階床	1000	8階床	8階床
10	9階床	1000	9階床	9階床
11	10階床	1000	10階床	10階床
12	11階床	1000	11階床	11階床
13	12階床	1000	12階床	12階床
14	13階床	1000	13階床	13階床
15	14階床	1000	14階床	14階床
16	15階床	1000	15階床	15階床
17	16階床	1000	16階床	16階床
18	17階床	1000	17階床	17階床
19	18階床	1000	18階床	18階床
20	19階床	1000	19階床	19階床
21	20階床	1000	20階床	20階床
22	21階床	1000	21階床	21階床
23	22階床	1000	22階床	22階床
24	23階床	1000	23階床	23階床
25	24階床	1000	24階床	24階床
26	25階床	1000	25階床	25階床
27	26階床	1000	26階床	26階床
28	27階床	1000	27階床	27階床
29	28階床	1000	28階床	28階床
30	29階床	1000	29階床	29階床
31	30階床	1000	30階床	30階床
32	31階床	1000	31階床	31階床
33	32階床	1000	32階床	32階床
34	33階床	1000	33階床	33階床
35	34階床	1000	34階床	34階床
36	35階床	1000	35階床	35階床
37	36階床	1000	36階床	36階床
38	37階床	1000	37階床	37階床
39	38階床	1000	38階床	38階床
40	39階床	1000	39階床	39階床
41	40階床	1000	40階床	40階床
42	41階床	1000	41階床	41階床
43	42階床	1000	42階床	42階床
44	43階床	1000	43階床	43階床
45	44階床	1000	44階床	44階床
46	45階床	1000	45階床	45階床
47	46階床	1000	46階床	46階床
48	47階床	1000	47階床	47階床
49	48階床	1000	48階床	48階床
50	49階床	1000	49階床	49階床
51	50階床	1000	50階床	50階床
52	51階床	1000	51階床	51階床
53	52階床	1000	52階床	52階床
54	53階床	1000	53階床	53階床
55	54階床	1000	54階床	54階床
56	55階床	1000	55階床	55階床
57	56階床	1000	56階床	56階床
58	57階床	1000	57階床	57階床
59	58階床	1000	58階床	58階床
60	59階床	1000	59階床	59階床
61	60階床	1000	60階床	60階床
62	61階床	1000	61階床	61階床
63	62階床	1000	62階床	62階床
64	63階床	1000	63階床	63階床
65	64階床	1000	64階床	64階床
66	65階床	1000	65階床	65階床
67	66階床	1000	66階床	66階床
68	67階床	1000	67階床	67階床
69	68階床	1000	68階床	68階床
70	69階床	1000	69階床	69階床
71	70階床	1000	70階床	70階床
72	71階床	1000	71階床	71階床
73	72階床	1000	72階床	72階床
74	73階床	1000	73階床	73階床
75	74階床	1000	74階床	74階床
76	75階床	1000	75階床	75階床
77	76階床	1000	76階床	76階床
78	77階床	1000	77階床	77階床
79	78階床	1000	78階床	78階床
80	79階床	1000	79階床	79階床
81	80階床	1000	80階床	80階床
82	81階床	1000	81階床	81階床
83	82階床	1000	82階床	82階床
84	83階床	1000	83階床	83階床
85	84階床	1000	84階床	84階床
86	85階床	1000	85階床	85階床
87	86階床	1000	86階床	86階床
88	87階床	1000	87階床	87階床
89	88階床	1000	88階床	88階床
90	89階床	1000	89階床	89階床
91	90階床	1000	90階床	90階床
92	91階床	1000	91階床	91階床
93	92階床	1000	92階床	92階床
94	93階床	1000	93階床	93階床
95	94階床	1000	94階床	94階床
96	95階床	1000	95階床	95階床
97	96階床	1000	96階床	96階床
98	97階床	1000	97階床	97階床
99	98階床	1000	98階床	98階床
100	99階床	1000	99階床	99階床



第23図 3号トレンチ平・断面図

主体とする自然堆積層で、南側に向かって傾斜し落ち込みを形成している。

(2) 検出遺構

調査段階では掘乱内のⅢb層上面から遺構を確認したが、この面で確認した遺構は本来帰属する層位がⅡ層上面あるいはⅢa層上面であったと考えられる。遺構は6面で確認しており、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面で石組溝跡1基、石組遺構5基、土坑7基、Ⅲc層上面で土坑1基、Vb層上面で土坑2基、Vc層上面で土坑1基、Ⅵ層上面で土坑3基を確認した。

S 62 石組溝跡 トレンチの中央に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。主軸方向はN-4°-Wである。石組みの遺存状態は悪く、トレンチの南側では確認できなかった。確認できた規模は南北方向の長軸が6.0m、東西南方向の溝幅が0.2m、掘り方の幅が2.3m、深さ0.2mである。石組みは径約20~30cmの円礫で構築され、底面には径約8cmの円礫が散設されている。底面はわずかではあるが、北から南へ4cm程度傾斜している。堆積土は10層で、1~3層は溝の堆積層で、シルトブロックや粗粒砂を含んでいる。4~6層は層厚約1cmの砂質シルト・シルト層が水平に堆積しており、これは水性堆積とみられる。7~9層は溝の掘り方、10層は石組みの掘り方に相当する。出土遺物は無かった。

S 63 石組遺構 トレンチの中央に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。S 62の0.3m西側を、同じ主軸方向に平行して並ぶ石組みである。確認できた規模は南北方向の長軸が2.7m、東西方向の短軸が0.4mである。石組みは径約20~30cmの円礫で構築されており、性格は不明である。出土遺物は無かった。

S 64 石組遺構 トレンチの北側に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。S 62の0.3m東側を平行して並ぶ石組みで、北側がトレンチ外へ延びると推定される。S 62よりも古い。確認できた規模は南北方向の長軸が1.5m、東西方向の短軸が0.4mである。径約20~30cmの円礫・角礫で構築され、石組みの小口面を西側に揃えている。出土遺物は無かった。

S 65 石組遺構 トレンチの北側に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。S 62の西側石列に接して直交する石組列で、主軸方向はE-6°-Nである。掘乱により壊されているが、西方向に延びると考えられる。確認できた規模は南北方向の長軸が0.6m、東西方向の短軸が0.4mである。径約20~30cmの円礫で構築されている。

S 66 石組遺構 トレンチの中央に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。S 62の石組みに接して直交する石組みで、主軸方向はE-2°-Sである。S 56よりも新しい。確認できた規模は東西方向の長軸が0.8m、南北方向の短軸が0.3mである。径約20cmの円礫で構築されている。出土遺物は無かった。

S 67 石組遺構 トレンチの南東に位置し、Ⅱ層上面あるいはⅢa層上面から掘り込んでいる。主軸方向はN-36°-Wで、他の石組遺構と軸方向が異なっている。確認できた規模は東西方向の長軸が1.7m、南北方向の短軸が0.4mである。石組みの上面は平坦に揃えられ、長さ0.6m、幅0.4mの板状の石材2枚が0.6m間隔で配置され、その間に径約30cmの円礫が配されている。出土遺物は無かった。

(3) 出土遺物

合計329点の遺物が出土した。全体的に小破片が多く遺存度は低い。

陶器

72点出土し、近世のものは67点ある。産地は肥前が多く全体の38%を占める。この他に美濃、大塚相馬、岸ほか少量だが現川、九州系、京・信楽などがある。器種は碗類が多く44%を占め、この他に皿類、鉢類、瓶類などがある。碗類は32点のうち16点が肥前のいわゆる呉器手の碗であり、他のトレンチに比べ出土量が多い。層的には各層から均等に出土している。このうち最も遺存度の高いI層から出土したものを図示した(第24図1)。Ⅲ層から出土した17世紀前半の美濃の菊皿(第24図2)は煤が付着しており、灯明皿として再利用された可能

性がある。この他にもⅢ層から18世紀代の美濃の灰釉徳利(第24図3)や、薄鉄釉のかかった播鉢が出土した(第24図4)。この播鉢については瀬戸美濃や信楽の播鉢とは釉薬や形状が異なっており、産地は明確でなく、在地産の可能性(注4)。

磁器

101点出土し、近世のものは72点ある。産地は肥前が多く全体の88%を占める。この他に波佐見がある。器種は碗類が多く39%を占め、他に皿類、鉢類などがある。Vc層から17世紀中頃の肥前の染付皿が出土した。

土師質土器

44点出土した。器種は皿類が多く93%を占め、この他に焼塩甕と鉢類などがある。皿類の多くは小破片である。全体を復元できるものはⅢ層とⅣ層から出土した2点だけで、共に口径7cm程度の小型の製品である。焼塩甕は小破片だが、Ⅲ層とS62から在地産の製品が1点ずつ出土した。

瓦質土器

3点出土した。I層出土のものは七輪などに用いられる五徳の破片であるが、時期は不明である。この他に攪乱とⅣ層から香炉が1点ずつ出土した。

瓦類

97点出土し、丸瓦25点、平瓦49点が全体の76%を占める。Ⅲ層から軒丸瓦が1点出土したが、瓦当の周縁部のみで文様は不明である。

土製品

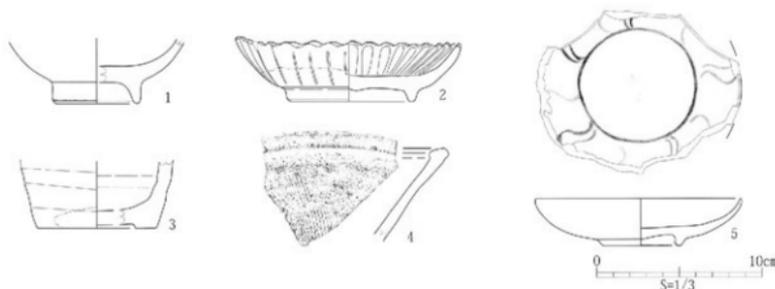
I層から碁石形の製品が1点出土した。

金属製品

6点出土した。種別は古銭、近現代の標語看板などがある。古銭はI層から古寛永が、Ⅲ層からは新寛永が1点ずつ出土した。

木製品

3点出土した。種別は漆器と木板がある。Ⅲ層とS67からは漆器が1点ずつ出土し、いずれも赤漆が用いられているが、塗膜部分のみの残存で器種は不明である。木板は攪乱から出土した。用途は不明である。



図録番号	図録番号	品名	器種	遺構・層位	寸法(cm)			重量	材質	特徴	備考	写真番号
					口径	高さ	底径					
1	153	浅鉢	碗	I層	—	5.0	—	—	磁器	17c後半 厚輪 灰器手	—	8-3
2	158	浅鉢	碗	II層	13.7	7.3	4.0	—	陶器	17c前半 鉄釉・厚輪設計 スズ付着 2枚重ねで灯明用として再利用したものか。	—	8-4
3	167	浅鉢	碗	II層	—	—	—	—	陶器	18c代 厚輪 厚部：厚肉作り 縁部：厚肉作り	—	8-5
4	163	浅鉢	碗	II層	—	—	—	—	磁器	17c後半 厚輪 口径7cm 兼土：灰白色 心地道の可能性あり。	—	8-6
5	161	浅鉢	碗	Vc層	(12.5)	4.4	3.6	—	陶器	17c中頃 染付 磁器(1層) 字文 内面：丸紐文 裏面内：丸紐文 裏付：牡丹文 裏裏付：牡丹文	—	8-7

第24図 3号トレンチ出土遺物

石製品

石製品はIV層から硯の破片が1点出土した。

5 4号トレンチ

追廻地区のほぼ中央付近に位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ10.0m、幅4.0mの規模で設定した。トレンチの西壁側に沿ってサブトレンチを設定した他、トレンチ中央の攪乱を利用して下層の確認を行い、自然堆積層である砂層を確認している。

(1) 基本層序

基本層序は10層に大別される。I層は現代の整地層である。トレンチの北側はV層上面まで攪乱されており、このためI層直下に堆積するII・III・IV層はトレンチの中央から南側のみ確認である。II～IX層は整地層で、II・V・VI・VIIa・IXb層は硬く締っており、各上面は生活面である可能性が高い。II～VI層は約5cmの均一な層厚で堆積している。IX層は西側サブトレンチの北側で確認し、a・bの2層に細分される。IXa層は炭化物を多量に含む。X層はにぶい黄褐色砂を主体とする自然堆積層である。

(2) 検出遺構

遺構は6面で確認しており、II層上面で柱穴4基、III層上面で土坑4基、ビット1基、V層上面で石敷遺構1基、VIIa層上面で不明遺構1基、VIIc層上面で土坑1基、IXb層上面で土坑8基を確認した。

S70・S71・S72・S73 柱穴 トレンチの南東に位置し、II層上面で確認した。4基の柱穴はN-9°-Wの軸に並んでおり、いずれも掘り方の一部が東側のトレンチ外へ延びている。各々の平面形は円形と推定され、確認できた掘り方の規模は南北方向の長軸が0.6～0.7m、東西方向の短軸が0.4～0.5m、深さ0.2mである。礎盤石はみられず、掘り方内に根止め石に相当する径約10～25cm人の円礫が充填されていた。堆積土は2層で、1・2層ともに褐色シルトを主体とし、1層は灰白色粘土ブロックを多量に含んでいる。出土遺物は無かった。

S74 石敷遺構 トレンチの南側に位置し、V層上面で一部を確認した。西側サブトレンチの底面で径約5cmの円礫を多量に含む層を確認した。この東側の一部をV層上面まで掘り下げた結果、円礫が充填されている状況がみられ、礫を敷設した遺構であることが判明した。遺構の全体形は不明だが、東西方向に延びると推定される。確認できた規模は東西方向に幅2.0m、深さは0.1mである。

S80 土坑 トレンチの北西に位置し、IXb層上面で確認した。平面形は西側の一部がトレンチ外へ延びているが、隅丸方形とみられる。確認できた規模は南北方向の長軸が0.9m、東西方向の短軸が0.4m、深さ0.2mである。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は単層で、黒褐色シルトを主体とし、灰白色粘土ブロックや炭化物を多量に含んでいる。堆積土はVIIc層と類似しており、VIIc層の堆積とはほぼ同時期に埋没したものと考えられる。出土遺物は無かった。

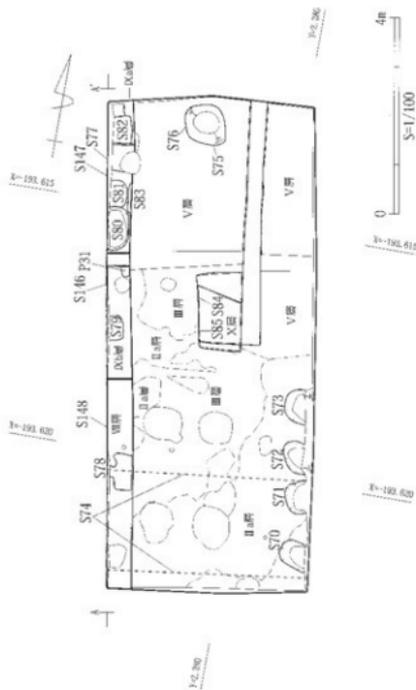
この他にIXb層上面からはS76・S77・S79・S81・S83・S84を確認したが、これらの堆積土もVIIc層と類似している。

(3) 出土遺物

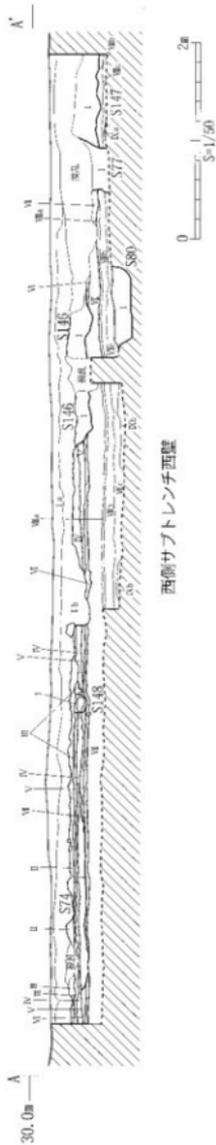
409点の遺物が出土した。遺物の多くは攪乱とI層中からのものである。全体的に小破片が多く、遺存度は低い。

陶器

97点出土し、近世のものは72点ある。産地は大塚相馬が多く全体の38%を占め、この他に唐津、肥前、美濃、小野相馬、埴などがある。器種は碗類が32%と多く、他に鉢類、瓶類、皿類などある。VIII層から19世紀前半に位置づけられる大塚相馬の鉄絵の土瓶や美濃のいわゆる「べこかん徳利」の底部破片が出土した。



図号	区画	用途	面積	備考
1	1	1	1	1
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
4	4	4	4	4
5	5	5	5	5
6	6	6	6	6
7	7	7	7	7
8	8	8	8	8
9	9	9	9	9
10	10	10	10	10
11	11	11	11	11
12	12	12	12	12
13	13	13	13	13
14	14	14	14	14
15	15	15	15	15
16	16	16	16	16
17	17	17	17	17
18	18	18	18	18
19	19	19	19	19
20	20	20	20	20
21	21	21	21	21
22	22	22	22	22
23	23	23	23	23
24	24	24	24	24
25	25	25	25	25
26	26	26	26	26
27	27	27	27	27
28	28	28	28	28
29	29	29	29	29
30	30	30	30	30
31	31	31	31	31
32	32	32	32	32
33	33	33	33	33
34	34	34	34	34
35	35	35	35	35
36	36	36	36	36
37	37	37	37	37
38	38	38	38	38
39	39	39	39	39
40	40	40	40	40
41	41	41	41	41
42	42	42	42	42
43	43	43	43	43
44	44	44	44	44
45	45	45	45	45
46	46	46	46	46
47	47	47	47	47
48	48	48	48	48
49	49	49	49	49
50	50	50	50	50



西側サブトレンチ西壁

第25図 4号トレンチ平・断面図



調査所	発見番号	地 層	出 所	出土・層位	土 質		産 地	時 期	備 考	写真番号
					口部	底面				
1	1146	土器層(4)層	堀原寺	2層	(6.4)	—	在 地	17c 代	磁土の薄板	9 頁

第 26 図 4号トレンチ出土遺物

軟質施釉陶器

3点出土し、近世のものは2点ある。ともに堤の焙烙である。

磁 器

146点出土し、近世のものは76点ある。産地は肥前が圧倒的に多く全体の86%を占める。この他に瀬戸美濃がある。器種は碗類が全体の39%、皿類が30%を占め、この他に鉢類や瓶類がある。

土質質土器

33点出土した。器種は皿類、焼塩壺、鉢類がある。皿類は全て小破片で詳細は不明である。焼塩壺はIV層から出土した在地の製品で、17世紀代に位置付けられるものである(第26図1)。鉢類は攪乱、I層から出土しており、近現代の植木鉢などが含まれる。

瓦質土器

13点出土し、全て小破片である。器種は壺類のみ見られる他は、小破片のため判別できない。攪乱とI層出土のもの時期は不明である。IV・VIII層からは近世陶磁器が出土しており、同層から出土した瓦質土器についても近世の製品と考えられる。

瓦 類

76点出土した。33点は小破片であり、種別の判別可能なものとしては丸瓦9点、平瓦30点の他、椀瓦、板瓦、伏間瓦がある。

土製品

I層から型押し中空の土人形の破片が1点出土した。堤人形の可能性がある。

金属製品

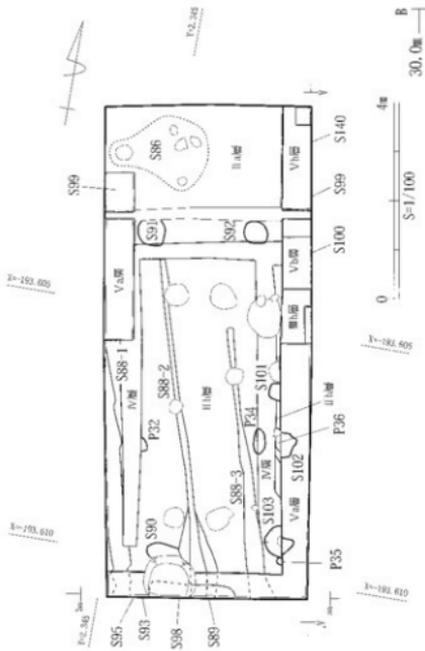
36点出土した。多くは攪乱とI層中からのものである。種別は釘・煙管・銃弾などがある。釘は全て丸釘で、近現代のものである。煙管はI層から火皿部分が出土した。

6 5号トレンチ

追廻地区の中央付近で現存する護岸石垣から約25m西側に位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ10.0m、幅4.0mの規模で設定した。またトレンチの東壁側・南壁側・西壁側に沿ってサブトレンチを設定した。

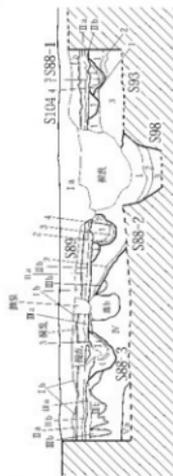
(1) 基本層序

基本層序は5層に大別される。I層は現代の整地層である。II・III層は混入物からみて人為的堆積と考えられる。II層はa・bの2層に細分され、IIb層は層厚約5cmで硬く締っている。IV・V層は浅黄褐色砂を主体とし、その色調や土質から4号トレンチのX層と対応する自然堆積層と考えられる。



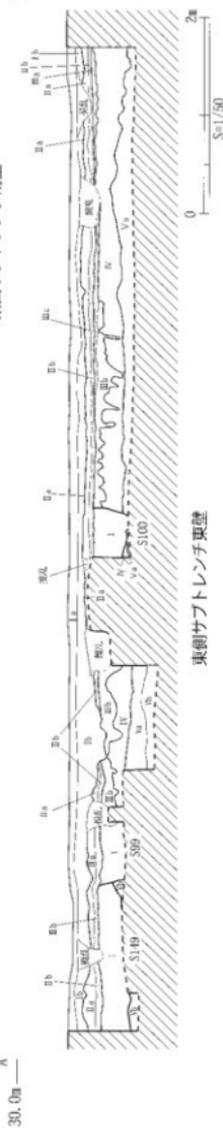
区画	名称	用途	備考
1	1区	事務所	
2	2区	倉庫	
3	3区	倉庫	
4	4区	倉庫	
5	5区	倉庫	
6	6区	倉庫	
7	7区	倉庫	
8	8区	倉庫	
9	9区	倉庫	
10	10区	倉庫	
11	11区	倉庫	
12	12区	倉庫	
13	13区	倉庫	
14	14区	倉庫	
15	15区	倉庫	
16	16区	倉庫	
17	17区	倉庫	
18	18区	倉庫	
19	19区	倉庫	
20	20区	倉庫	
21	21区	倉庫	
22	22区	倉庫	
23	23区	倉庫	
24	24区	倉庫	
25	25区	倉庫	
26	26区	倉庫	
27	27区	倉庫	
28	28区	倉庫	
29	29区	倉庫	
30	30区	倉庫	
31	31区	倉庫	
32	32区	倉庫	
33	33区	倉庫	
34	34区	倉庫	
35	35区	倉庫	
36	36区	倉庫	
37	37区	倉庫	
38	38区	倉庫	
39	39区	倉庫	
40	40区	倉庫	
41	41区	倉庫	
42	42区	倉庫	
43	43区	倉庫	
44	44区	倉庫	
45	45区	倉庫	
46	46区	倉庫	
47	47区	倉庫	
48	48区	倉庫	
49	49区	倉庫	
50	50区	倉庫	
51	51区	倉庫	
52	52区	倉庫	
53	53区	倉庫	
54	54区	倉庫	
55	55区	倉庫	
56	56区	倉庫	
57	57区	倉庫	
58	58区	倉庫	
59	59区	倉庫	
60	60区	倉庫	
61	61区	倉庫	
62	62区	倉庫	
63	63区	倉庫	
64	64区	倉庫	
65	65区	倉庫	
66	66区	倉庫	
67	67区	倉庫	
68	68区	倉庫	
69	69区	倉庫	
70	70区	倉庫	
71	71区	倉庫	
72	72区	倉庫	
73	73区	倉庫	
74	74区	倉庫	
75	75区	倉庫	
76	76区	倉庫	
77	77区	倉庫	
78	78区	倉庫	
79	79区	倉庫	
80	80区	倉庫	
81	81区	倉庫	
82	82区	倉庫	
83	83区	倉庫	
84	84区	倉庫	
85	85区	倉庫	
86	86区	倉庫	
87	87区	倉庫	
88	88区	倉庫	
89	89区	倉庫	
90	90区	倉庫	
91	91区	倉庫	
92	92区	倉庫	
93	93区	倉庫	
94	94区	倉庫	
95	95区	倉庫	
96	96区	倉庫	
97	97区	倉庫	
98	98区	倉庫	
99	99区	倉庫	
100	100区	倉庫	

B



東西サブトレンチ南壁

N



東側サブトレンチ東壁

第27図 5号トレンチ平・断面図

(2) 検出遺構

遺構は4面で確認しており、Ⅱa層上面で礎石1基、土坑1基、ピット3基、Ⅱb層上面で溝跡4条、土坑3基、ピット4基、Ⅲa層上面で柱穴1基、土坑7基、Ⅳ層上面で柱穴3基を確認した。

S 88-1~3 溝跡 トレンチの中央から西側に位置し、Ⅱb層上面で確認した。各溝はN-16°-Wを主軸とし並行している。確認した規模は南北方向に長軸がS 88-1は5.2m、S 88-2は6.9m、S 88-3は5.5mとなり、S 88-2が最も遺存状態が良好である。断面形はU字形である。S 88-2は上端幅0.1~0.3m、下端幅0.2m、深さ0.3mである。底面はわずかではあるが、北から南へ4cm程度傾斜している。各溝間の幅はS 88-1~2が1.2m、S 88-2~3が1.0mである。これらの溝はその形態から、畑の耕作痕跡の可能性が高い。堆積土はS 88-1で3層、S 88-2で4層、S 88-3で3層に分けられ、1層・3層・4層が各溝に共通している。1層は青灰色粘土質シルトを主体とし、灰白色シルトがラミナ状に堆積する。2層はS 88-2にのみ存在しており、1層と同質の堆積層に細分される。3層は青灰色粘土質シルトを主体とする。4層は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、1層同様に灰白色シルトがラミナ状に堆積している。全層とも硬く締っている。堆積土については土壌分析を行ったが（第3章参照）、栽培に関わる種群は1個体も検出されなかった。花粉分析の結果では、本木花粉ではマツ属・スギ属の多産が顕著で、その他では湖畔や低湿地に林分を形成するハンノキ属などが認められた。草木類ではイネ科をはじめ、カヤツリグサ科、アカザ科などが認められており、溝周辺には草地在存在し、これらの草木類が生育していたと推測されている。出土遺物は無かった。

S 98 土坑 トレンチの南側に位置し、Ⅲa層上面で確認した。平面形は南側がトレンチ外へ延びているが、隅丸方形と推定される。規模は東西方向の長軸が1.8m、南北方向の短軸が0.3m、深さ0.7mである。断面形は逆台型で底面は平坦である。堆積土は3層で、1層は褐色シルトを主体とし、灰黄色シルトブロック・炭化物を多量に含んでいる。出土遺物は無かった。

S 103 柱穴 トレンチの南東に位置し、Ⅳ層上面で確認した。平面形は円形で、壁面は急に立ち上がる。規模は径0.6mで、深さ0.3mである。堆積土は2層に分けられ、1層は柱の抜き取り痕跡で、褐色砂質シルトが堆積する。2層は掘り方で、褐色シルトが主体で締りが強い。出土遺物は無かった。

またⅣ層上面からS 103柱穴の北側に、ほぼ同等の規模をもつ柱穴のS 101とS 102を確認した。これらはN-11°-Wの軸に並んでおり、掘り方規模がほぼ同じであることから、柱穴列と考えられる。

(3) 出土遺物

合計15点の遺物が出土した。遺物量は少なく大半が撚乱とI層からの出土である。小破片が多く、図示できる遺物は無い。

陶器

2点出土したが、全て近現代のものである。

磁器

4点出土し、近世のものは2点ある。産地は肥前で器種は鉢類である。

瓦質土器

3点出土した。器種は鉢類である。瓦質土器は全てI層から出土しており、時期は不明である。

瓦類

6点出土した。全てI層出土である。軒平瓦が1点出土したが、瓦当部が欠落し、文様は不明である。

金属製品

撚乱とI層から3点出土した。種別は近現代の銭貨などがある。

木製品

I層から木板が1点出土した。用途は不明である。

石製品

掘乱から礫石が1点出土した。

その他の遺物

V層より古代の上師器が1点出土した。小破片のため器種は不明である。

7 6号トレンチ

追廻地区の中央からやや南側に位置する。トレンチは南北方向に長さ10.0m、幅4.0m規模で設定した。またトレンチの西側に沿ってサブトレンチを設定した。

(1) 基本層序

基本層序は8層に大別される。I層は現代の整地層である。II～IV層はほぼ水平に堆積し、粘土ブロック・炭化物の他に遺物を少量含む整地層である。V層は砂を主体とする自然堆積層で、a・bの2層に細分される。Vb層は粗粒砂がラミナ状に堆積し、河川起源の堆積層である(注5)。VI層は砂を主体とし、a～cの3層に細分される。VIa・VIc層は炭化物を含み、特にVIc層には多量に含んでいる。このことからVI層は人為的な堆積層とみられ、V層の堆積以前にも生活面が形成されていたと考えられる。VII層は灰色砂、VIII層は暗灰黄色砂を主体とする自然堆積層であるが、同じく砂質の自然堆積層である4号トレンチのX層、5号トレンチのY層と比べると色調は暗い。

(2) 検出遺構

遺構は5面で確認しており、II層上面で柱穴4基、清跡5条、土坑9基、III層上面でピット1基、IV層上面で土坑2基、ピット2基、VIa層上面で土坑2基、VIII層で土坑1基を確認した。

S 106 土坑 トレンチの北西に位置し、II層上面で確認した。平面形は北側と西側がトレンチ外へ延びているが、隅丸方形と推定される。確認した規模は東西方向の長軸が1.7m、南北方向の短軸が1.4m、深さ0.3mである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層で1層は黄灰色シルトを主体とし、灰白色シルトブロックを密に含んでいる。2・3層はオリーブ黒色シルトを主体とする。出土遺物は近世陶磁器類、瓦類などが少量ある。

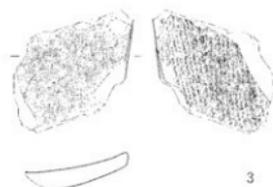
S 113・S 114・S 115 柱穴 トレンチの南東に位置し、II層上面で確認した。3基の柱穴はN-5°-Wの同軸線上に並んでいる。平面形は不整形円で、径は0.5～0.6mである。各柱穴からは径15～20cmの柱痕跡が確認でき、柱間寸法はS 113-S 114間で2.7m、S 114-S 115間で2.1mである。S 115については半掘しており、深さ0.4mで、底面は平坦、壁面は垂直に立ち上がるものである。S 115の堆積土は3層で、1層は柱の抜き取り痕跡、2・3層は掘り方である。出土遺物は無かった。

(3) 出土遺物

合計122点の遺物が出土し、多くは掘乱とI層からのものである。その他S 106・107からも少量出土した。点数比では近現代の陶磁器類が最も多く、全体の29%を占める。点数は少ないがIII層からは17世紀後半代の遺物のみが出土した。

陶器

32点出土し、近世のものは20点ある。産地は大塚相馬、唐津、波佐見が多く、点数比的には各々15%を占める。この他に肥前、小野相馬、岸などがある。器種は碗類が29%と多く、この他に皿類、鉢類、搦鉢などある。II層からは層の時期を示すものではないが、17世紀後半から18世紀前半の波佐見の陶胎染付碗(第29図1)、III層からは17世紀後半の肥前の呉器手の碗が出土した。



図録番号	図録番号	種類	器種	通体・顔色	寸法 (cm)			所在地	時期	備考	写真番号
					径	高さ	厚				
1	L90	陶器	鉢	土質	13.5	7.9	5.3	波佐見	近世	陶器製作 持原・山本文 録納	8-9
2	L130	瓦質土器	小壺	土質	4.3	—	—	波佐見	近世	陶器製作 持原・山本文 録納	8-10
3	G3	平瓦	複瓦	—	—	1.9	0.34	西代	古	陶器製作 持原・山本文 録納	8-11

第29図 6号トレンチ出土遺物

磁器

37点出土し、近世に属するものは7点ある。小破片が多く遺存度は低い。産地は肥前と波佐見、瀬戸美濃があり、器種は碗類、皿類などがある。Ⅲ層中からは17世紀後半の波佐見の青磁印刻文皿、S106からは18世紀後半の肥前の染付唐草文皿が出土した。

土師質土器

14点出土した。器種は皿類、鉢類、小型容器がある。皿類は小破片のため詳細は不明である。鉢類、小型容器は攪乱及び1層から出土しており、時期は不明である。

瓦質土器

6点出土した。器種は鉢類と小壺がある。Ⅵa層から出土した小壺は外面に印花文が施されている(第29図2)。

瓦類

16点出土した。種別は丸瓦3点、平瓦8点の他にS107からは板瓦2点、伏間瓦が1点出土した。

土製品

攪乱から礫石形の製品が1点出土した。

金属製品

12点出土した。種別は釘でS106・S107から出土したものは近世の角釘と考えられるが、これ以外は丸釘である。

その他の遺物

攪乱から古代の瓦が1点出土した。平瓦で、凸面に縄叩きが見られる(第29図3)。

8 7号トレンチ

追廻地区の南側に位置する。トレンチは南北方向を軸に長さ10.0 m、幅4.0 m規模で設定した。またトレンチの東壁側に沿ってサブトレンチを設定した他、トレンチ中央の攪乱を利用して、下層の確認を行い、自然堆積層である砂礫層を確認した。

(1) 基本層序

基本層序は12層に大別される。1層は現代の整地層である。Ⅱ～Ⅶ層は均一な層厚で水平に堆積する整地層である。Ⅱ～Ⅳ層はトレンチ中央の攪乱のため、北壁付近と南側のみで確認できた。Ⅱ・Ⅳa・Ⅴ層は狭く締ってお

り、各上面は生活面である可能性が高い。VI層は浅黄色シルトブロックを主体としており、小礫・粗粒砂をわずかに含んでいる。この層はVII a層上面で確認した遺構の堆積土に類似しており、遺構の埋没と層の堆積がほぼ同時期であったと考えられる。VII～X II層は河川起源の自然堆積の砂層である。IX層はa～bの2層に細分される。IX a層は黄灰色砂、IX b層はオリブ黒色砂を主体とし、第2次調査で確認した砂層の中では最も暗い色調となる。X I層はa・bの2層に細分され、X I b層の下層には円礫が堆積し、円礫の間には粗粒砂がみられる。X II層は灰黄色砂を主体とし、円礫が堆積している。X I b・X II層は河床の堆積層である(注6)。

(2) 検出遺構

遺構は4面で確認しており、II層上面で溝跡1条、土坑4基、小穴2基、V層上面で土坑3基、VI層上面で柱穴1基、土坑3基、VII a層上面で土坑3基を確認した。なおII層上面で確認したS 118溝跡は溝中に拳大の円礫が充填されており、第二師団時代の暗渠の可能性もある(注7)。

S 129 柱穴 トレンチの北側に位置し、IV層上面で確認した。トレンチ中央に位置する掘乱の北側で遺構断面を確認できただけであり、平面形は不明である。確認できた規模は東西方向に0.7 m、深さ0.4 mである。断面形は逆台形で底面の中央が窪んでおり、径約20 cmの礎盤石が据えられている。堆積土は5層に分けられ、1層は灰黄色シルトを主体とし、下面には平坦面を持つ径約15 cmの礫がみられる。3～5層は掘り方である。出土遺物は無い。

1層下面に位置する礫は礎盤石と考えられ、掘り込み底面の礎盤石のほぼ垂直上に位置している。このことからこの柱穴は造り変えが行われたと考えられる。

(3) 出土遺物

合計65点の遺物が出土した。遺物はいずれも小破片で図示できるものは無い。

陶器

陶器は5点出土し、近世のものは2点ある。IV層からは17世紀代の肥前の灰釉碗、VII層から19世紀前半に位置づけられる大塚相馬の白濁釉の土瓶が出土した。

磁器

7点出土し、近世のものは2点ある。近世磁器はIV層から出土しており、19世紀代の肥前の端反碗がある。

土師質土器

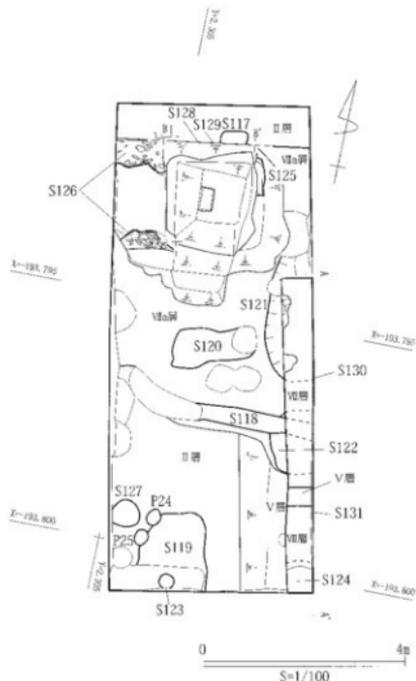
2点出土した。器種は皿類と鉢類がある。皿類は小破片のため詳細は不明である。鉢類は1層から出土しており、時期は不明である。

瓦類

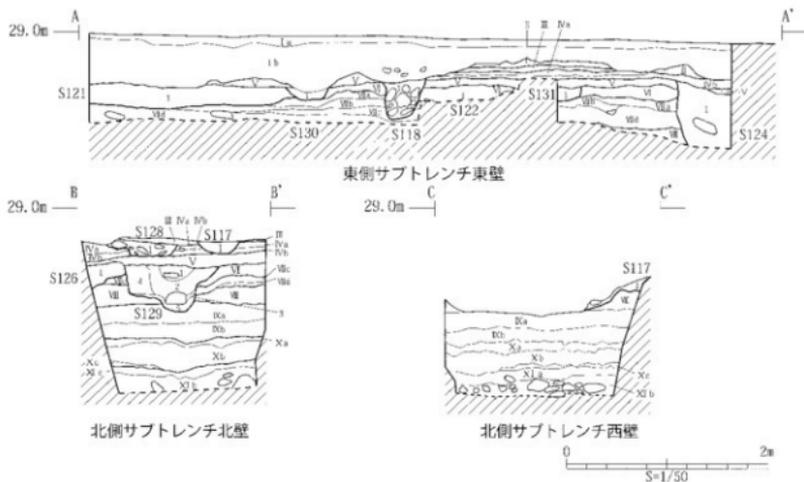
50点出土し、丸瓦10点、平瓦30点の他に、小破片のため種別の判別が不可能なものが10点ある。

金属製品

S 124より鉄製品が1点出土した。腐食が激しく、種別は不明である。



第30図 7号トレンチ平面図



層位	土層	土質	備考	調査番号	高性	土層	土質	備考
1a	1.75m 砂質粘土	砂	1層中に含む。空層部は砂質粘土。	Xc	198/1	砂	砂	1層中に含む。空層部は砂質粘土。1層中に含む。
1b	198/1 黄土	シルト	1.9mから下は砂。	X1a	1.57/1	黄土	砂	1層中に含む。空層部は砂質粘土。
2	2.07/1 砂質土	シルト	高層に砂質土が混入し、層厚が厚くなる。	X12	107/1	砂質土	砂	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
3	2.07/1 黄土	シルト	高層に砂質土が混入し、層厚が厚くなる。	X4	1.97/1	黄土	砂	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
IV	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1117	1	107/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
IVa	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1118	1	107/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
V	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1122	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
VI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1124	1	2.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
VII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1125	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
VIII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1126	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
IX	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1127	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
X	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1128	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1129	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1130	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XIII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1131	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XIV	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1132	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XV	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1133	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XVI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1134	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XVII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1135	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XVIII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1136	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XIX	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1137	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XX	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1138	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1139	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1140	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXIII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1141	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXIV	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1142	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXV	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1143	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXVI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1144	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXVII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1145	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXVIII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1146	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXIX	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1147	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXX	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1148	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXXI	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1149	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。
XXXII	2.07/1 黄土	シルト	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。	1150	1	1.10/1	黄土	1層中に含む。1層中に含む。1層中に含む。

第31図 7号トレンチ土層断面図

- (注2) 佐藤 洋氏による。
- (注3、7) 藤澤 敦氏による。
- (注4) 鈴木裕子氏による。
- (注5、6) 松本秀明氏による。

第3節 第3次調査

1 調査経過

第3次調査地点は追廻地区の南東端に位置しており、調査は近代に人り埋められた近世期に造られた八瀬川護岸石垣の位置と構造の確認を目的として行った。トレンチは各種絵図から石垣のラインを推定し、これに直交するように長さ30m、幅4～6mの規模で設定した。

調査は近年の整地層である1層を重機により除去し、出土遺物に留意しながら近代の整地土を順次掘り下げてい

った。トレンチの中央から東側については河川側への傾斜が認められ、掘削深度が増すため段掘りを行った。I層より下層を人力により掘り下げ、遺構確認面での精査や遺構確認を行った。確認した遺構は基本的に掘り込みを行わなかったが構造説明上また下層に別の遺構面が存在することが判明した場合はこれを掘り込み、下層遺構を確認した。調査の進行に伴い数基の石組遺構を確認しており、これらの性格を解明することと基本層序の確認のため、再度重機による下層への掘削を行った。またこの地区には一連の遺構とは別に、大正10年(1921)、下流の愛宕下発電所の発電用水を送るために開削された隧道の存在が想定されており、この隧道に関連する導水トンネルの存否確認も当面の調査目的となった。トレンチの西側に導水トンネルの掘り込みを確認し、その堆積土についても重機による掘削を行い導水トンネルに相当するコンクリート管を確認した。

10月10日、仙台城跡指導委員会の視察が行われた。同日、高所作業車を使用してトレンチの全景撮影を行った。10月21日からトレンチの埋め戻しを行った。埋め戻しに先行して、掘り込みを行った遺構や石組遺構については土嚢で覆い、その後調査面を保護するためブルーシートを敷き詰め養生した。埋め戻しは発生土のうち礫等の混入物が少ない土を厚さ10cm程度敷き詰め、その後重機による埋め戻しを行った。

2 基本層序

基本層序は7層に大別される。ただしトレンチの西端部で確認した堆積層については、主たる層序との間に導水トンネルによる断絶があることから、別の層序を付した。

I層は追廻住宅の建設や解体に伴う整地層である。II層はトレンチ全域にみられる黒褐色シルトを主体とした層で、出土遺物に近代以降の陶磁器類を含むことから、近代以降の整地層とみられる。

III～VI層は近世以降の整地層である。III層は東部の石組遺構(S179)の東側のみみられ、かつての傾斜地を平坦にするために盛られた整地層である。IV層は西半部の限られた地区にのみ確認され、砂礫と小円礫を含む砂礫層が互層を成す版築状の整地層である。全体に北西側から南東側へ下る傾斜が認められ、a・bの2層に細分される。IV a層は層厚があり版築状に5層、IV b層は2層にさらに細分される。IV a 1層はS165石敷に相当し、径約10～30cm大の円礫を含んでいる。V層はIV層の河川側にあり、S175～S178の一連の遺構の上部や内部に確認でき、a～dの4層に細分される。V a層は淡黄褐色粘土を主体とし、S175石組の上面を覆うように堆積する。V c層は炭化物層と砂層が互層を成し、さらに5層に細分される。V c層は東南に向かって傾斜し、S175に流入することから、S175の堆積土の一部とみられる。V c層からは18世紀前半の遺物がややまとまって出土した。VI層は砂質シルトを主体とし、層中には小礫や粘土ブロックを含むことから、当地区における早い段階の人為的整地層と考えられ、河川側に緩やかに傾斜している。

VII層は河川起源の自然堆積層で、a～eの5層に細分される。VII a～VII d層は砂質シルト層で洪水堆積層、VII e層は砂礫層で河床堆積層とみられる(注8)。

トレンチ西端部はI層以下を西II～西V層に大別した。西II層は砂質シルトを主体とする。西III層は灰黄褐色シルトを主体とし、洪水起源の自然堆積層とみられる。西IV層は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、a～dの4層に細分され、炭化物やシルト粒、拳人の円礫をわずかに含むことから人為的整地層と推定される。西V層は砂を主体とする自然堆積層で、a～cの3層に細分される。中でも西V c層は黒褐色砂を主体とし、円礫を多量に含み、円礫間に粗粒砂が認められる。この層については、西側に近接する第2次調査7号トレンチのXI b層と類似しており、河床の堆積と判断される(注9)。

3 検出遺構

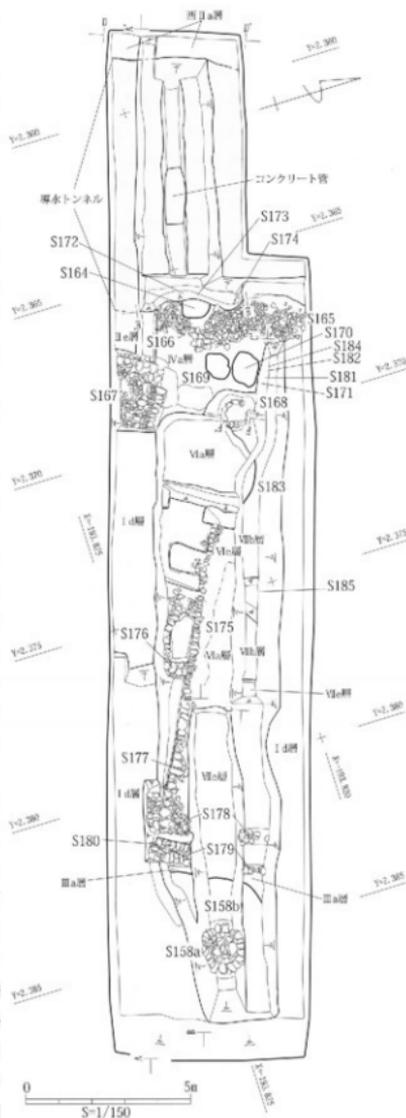
I層中から石組遺構1基、II層上面からは導水トンネルを確認したが、これらは近代のものである。遺構は8面で確認しており、III a層上面では月戸跡1基、IV a層中では石組遺構2基、石敷遺構2基、上坑3基、IV b層上面では上坑4基、V a層上面では石組遺構1基、溝跡1条、上坑3基、V層中からは石組遺構3基、礫群2基、VI

e層上面では土坑1基、VI f層上面では土坑2基、VII b層上面では土坑2基を確認した。

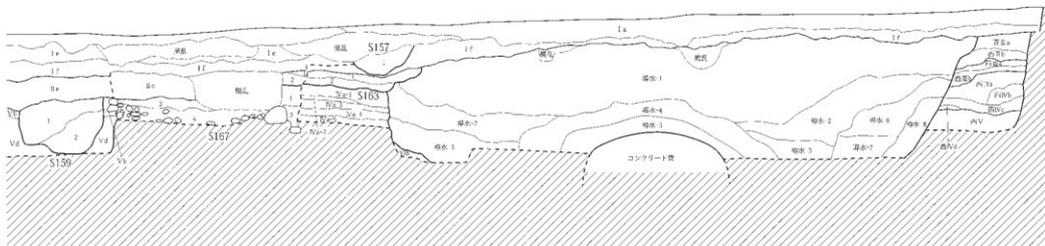
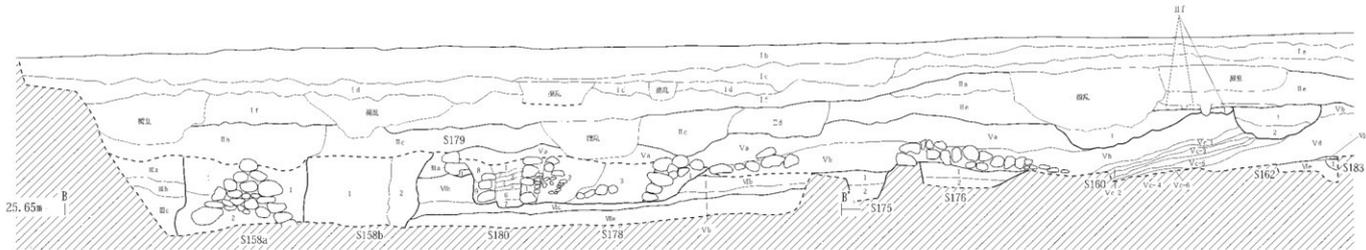
S 158 井戸跡 トレンチの東端に位置し、III a層上面で確認した石組みの井戸である。造り替えにより2時期に分けられる。井戸上部は失われおり、内部に崩落した円礫がみられる。断面観察から、西側のS 158 bが古く、石組みを外した後、東側にS 158 aを造り直している。S 158 aの平面形は円形で、壁には径約30～40 cmの円礫が組まれている。井戸の内径は0.8 m程度で、深さは不明である。掘り方径は1.6 mである。掘り方の埋土は暗灰黄色砂質シルトを主体とする。S 158 bはS 158 aの西側に幅1.0 mの掘り込みを確認し、その壁面は垂直に立ち上がる。堆積土はオリーブ褐色砂質シルトを主体とする埋め戻し土とみられる。S 158 a及びS 158 bからの出土遺物は無かった。

S 165・S 166 石敷遺構 トレンチの中央に位置し、版築状の整地層であるIV層により構成されているとみられる。石敷き状となる層はS 165がIV a-1層、S 166がIV a-4層である。導水トンネルやS 172より古い。確認できた範囲は南北方向に1.7 m、東西方向に1.2～1.4 mで、西及び東側への石敷きの広がり不明である。円礫の大きさは径約10～30 cmである。石敷き上面の高さは北側が高く、南側へ傾斜している。出土遺物は各々近世陶磁器が少量ある。S 165はIV層上面に敷設されたものであるが、S 166はIV層中のものであり、相互の性格には違いがある可能性もある。

S 167 石組遺構 トレンチの南側に位置し、IV層中で確認した。主軸がE-25°-Sとなる北側の並行する2列の石組みと、これと直交する西側の1列の石組みにより構成される。本来の全体形は不明である。北側の石列は径約20～30 cmの楕円礫が1段確認でき、2列は相互に向き合い、小口面を揃えることで、溝を形成しているものと考えられる。溝幅は0.2 mで、底面には円礫が敷設されている。西側の石列には径約30 cm大の円礫が1段確認でき、小口面を西側に揃えている。また石列西側の外側下面には径約20 cmの小円礫による石列が平行して並んでいる。これらの石列により囲まれた南東側底面には全体に小円礫が敷設され、北側の溝部分と一体となり面的な広がりをもつ遺構とみられる。出土遺物は



第32図 第3次調査区平面図



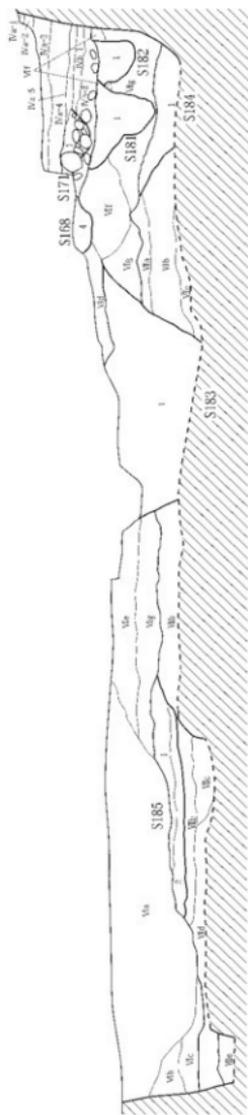
0 2m
S-1/50

層	土名	土質	備考	層	土名	土質	備考	層	土名	土質	備考	層	土名	土質	備考
1a	1a-1	砂質土	砂	1a-1	1a-1	砂質土	砂	1a-1	1a-1	砂質土	砂	1a-1	1a-1	砂質土	砂
1b	1b-1	砂質土	砂	1b-1	1b-1	砂質土	砂	1b-1	1b-1	砂質土	砂	1b-1	1b-1	砂質土	砂
1c	1c-1	砂質土	砂	1c-1	1c-1	砂質土	砂	1c-1	1c-1	砂質土	砂	1c-1	1c-1	砂質土	砂
1d	1d-1	砂質土	砂	1d-1	1d-1	砂質土	砂	1d-1	1d-1	砂質土	砂	1d-1	1d-1	砂質土	砂
1e	1e-1	砂質土	砂	1e-1	1e-1	砂質土	砂	1e-1	1e-1	砂質土	砂	1e-1	1e-1	砂質土	砂
1f	1f-1	砂質土	砂	1f-1	1f-1	砂質土	砂	1f-1	1f-1	砂質土	砂	1f-1	1f-1	砂質土	砂
1g	1g-1	砂質土	砂	1g-1	1g-1	砂質土	砂	1g-1	1g-1	砂質土	砂	1g-1	1g-1	砂質土	砂
1h	1h-1	砂質土	砂	1h-1	1h-1	砂質土	砂	1h-1	1h-1	砂質土	砂	1h-1	1h-1	砂質土	砂
1i	1i-1	砂質土	砂	1i-1	1i-1	砂質土	砂	1i-1	1i-1	砂質土	砂	1i-1	1i-1	砂質土	砂
1j	1j-1	砂質土	砂	1j-1	1j-1	砂質土	砂	1j-1	1j-1	砂質土	砂	1j-1	1j-1	砂質土	砂
1k	1k-1	砂質土	砂	1k-1	1k-1	砂質土	砂	1k-1	1k-1	砂質土	砂	1k-1	1k-1	砂質土	砂
1l	1l-1	砂質土	砂	1l-1	1l-1	砂質土	砂	1l-1	1l-1	砂質土	砂	1l-1	1l-1	砂質土	砂
1m	1m-1	砂質土	砂	1m-1	1m-1	砂質土	砂	1m-1	1m-1	砂質土	砂	1m-1	1m-1	砂質土	砂
1n	1n-1	砂質土	砂	1n-1	1n-1	砂質土	砂	1n-1	1n-1	砂質土	砂	1n-1	1n-1	砂質土	砂
1o	1o-1	砂質土	砂	1o-1	1o-1	砂質土	砂	1o-1	1o-1	砂質土	砂	1o-1	1o-1	砂質土	砂
1p	1p-1	砂質土	砂	1p-1	1p-1	砂質土	砂	1p-1	1p-1	砂質土	砂	1p-1	1p-1	砂質土	砂
1q	1q-1	砂質土	砂	1q-1	1q-1	砂質土	砂	1q-1	1q-1	砂質土	砂	1q-1	1q-1	砂質土	砂
1r	1r-1	砂質土	砂	1r-1	1r-1	砂質土	砂	1r-1	1r-1	砂質土	砂	1r-1	1r-1	砂質土	砂
1s	1s-1	砂質土	砂	1s-1	1s-1	砂質土	砂	1s-1	1s-1	砂質土	砂	1s-1	1s-1	砂質土	砂
1t	1t-1	砂質土	砂	1t-1	1t-1	砂質土	砂	1t-1	1t-1	砂質土	砂	1t-1	1t-1	砂質土	砂
1u	1u-1	砂質土	砂	1u-1	1u-1	砂質土	砂	1u-1	1u-1	砂質土	砂	1u-1	1u-1	砂質土	砂
1v	1v-1	砂質土	砂	1v-1	1v-1	砂質土	砂	1v-1	1v-1	砂質土	砂	1v-1	1v-1	砂質土	砂
1w	1w-1	砂質土	砂	1w-1	1w-1	砂質土	砂	1w-1	1w-1	砂質土	砂	1w-1	1w-1	砂質土	砂
1x	1x-1	砂質土	砂	1x-1	1x-1	砂質土	砂	1x-1	1x-1	砂質土	砂	1x-1	1x-1	砂質土	砂
1y	1y-1	砂質土	砂	1y-1	1y-1	砂質土	砂	1y-1	1y-1	砂質土	砂	1y-1	1y-1	砂質土	砂
1z	1z-1	砂質土	砂	1z-1	1z-1	砂質土	砂	1z-1	1z-1	砂質土	砂	1z-1	1z-1	砂質土	砂

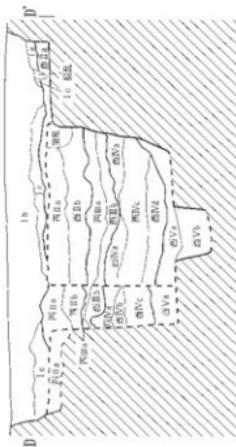
第33図 第3次調査区 南壁土層断面図

※ B-B'の破線以下の下層部分は確認断面位置が異なるが、A-A'に投影し、合成したものである。

28.0m
C

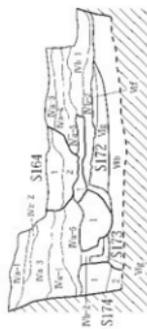


北側サブトレンチ南壁



トレンチ西壁

28.0m
E



湧水トンネル掘り方東壁

28.0m
F



0 1 2m
S=1/50

第34図 第3次調査区土層断面図

近世の陶磁器類が少量ある。

S 168 石組遺構 トレンチの中央に位置し、IV層中で確認したが、IV a - 1層上面からの掘り込みとみられる。平面形は円形で、壁には径約 20 ~ 30 cm の円礫が 6 段程度に積まれている。石組みの内径は 0.7 m、深さ 0.7 m で、底面は平坦である。掘り方は径 1.0 m の不整形円形である。堆積土は 4 層に分けられ、3 層は黒色シルトを主体とし、炭化物を多量に含む。4 層は掘り方に相当し、灰褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物は近世陶磁器類が少量ある。

S 175 石組遺構 トレンチの中央に位置し、VI 層上面で確認したが、遺構内に V c 層が傾斜して堆積することから、本来は VI 層上面より上からの掘り込みと判断される。石列の主軸方向は E - 24° - S である。この遺構は北側を東西石組列による壁とし、南側に面的に広がりをもったものと推定され、確認した規模は東西方向の長軸が 9.1 m、南北がトレンチ南壁までの 1.5 m で、残存する深さは 0.2 ~ 0.4 m である。石組みの南側面は南東方向へ緩やかに傾斜している。壁には 3 段程度に円礫が積み、小口面を南側に揃えている。石の積み方は西側に 20 ~ 30 cm のやや小振りの楕円礫を 3 段程度積んでいるのに対し、東側は最下段は西側と同様だが、その上に 40 cm 大の大きめの円礫や角礫を不規則に積んでおり、場所により異なった構築状況が窺える。この状況から東側の石組みは後に積み直されている可能性もある。堆積土は遺構内全体にみられる V b 層と炭化物層と砂層が互層となる西側の V c 層である。出土遺物は V c 層から 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての陶磁器類のほか、多くの土師質土器皿片がある。また遺構中央及びトレンチ南壁に S 176 とした円礫がまぎらって確認できた部分があるが、これは同溝の一部の石組みかそれらが崩落したものの可能性がある。

S 178・S 180 石組遺構 トレンチの東側に位置し、確認できた規模は南北方向の長軸は S 178 が 2.4 m、S 180 が 1.0 m である。この 2 列の石組みは相互に向き合い、小口面を揃えることで、1 条の溝を形成しているものと考えられる。溝幅は 0.3 m、深さは 0.7 m である。S 178 は西側の護岸石組であり、主として径約 20 ~ 30 cm の円礫を不規則に 4 ~ 5 段程度、東側に小口面を揃えやや傾斜するように積まれている。この石組みには 40 cm 程度の切石もみられ、これは石垣から転用されたものと推測される。石組みの背面には東込石がみられる。掘り方は深さ 0.6 m であり、掘り方の堆積土は黒色シルトを主体とする。S 180 は溝内部と東側の護岸石組であり、石組みは崩落がみられるが径約 20 ~ 30 cm の円礫が 3 段程度積まれている。堆積土は 9 層に分けられる。このうち溝の堆積土は 7 層に分けられ、粘土質シルトとシルト層が互層をなし水平に堆積している。2・4・6 層は灰褐色シルトを主体とし礫・粗砂を含み、7 層は淡黄褐色粘土質シルトを主体としマンガン化した砂粒を含む。8・9 層は石組みの掘り方で黒色シルトを主体としている。溝跡の西側には S 175 が接している。この地点の南及び東側への両遺構の伸びはトレンチ外のため確認できなかったが、両遺構には重複関係があるのか、あるいは接続部分で S 178 の石組みが途切れる状況などから、両者は同時に機能していた可能性もある。出土遺物は S 178 掘り方及び溝内より近世陶磁器類が少量ある。

S 179 石組遺構 トレンチの東側に位置し、V a 層上面で確認した。S 175 に直行し S 178・S 180 と平行してみられる。石列の主軸方向は N - 26° - E であり、確認できた規模は南北方向の長軸が 2.4 m、掘り方の深さは 0.4 m である。石組みは径約 20 ~ 30 cm の楕円礫を 2 段積んでおり、礫の長軸は東西方向を示す。掘り方の堆積土はオリーブ黒色砂質シルトを主体とする。この石組みを境として、その東側のみに土層の堆積が確認されていることから、河川側の東方向へ盛土を行う際に、土留めとして積まれた可能性が考えられる (注 10)。

4 出土遺物

合計 906 点の遺物が出土した。出土傾向としては、II 層から 19 世紀前半、IV 層からは 18 世紀、V c 層からは 17 世紀末から 18 世紀前半にかけての遺物がややまとまって出土している。また V c 層からは土師質土器が多く、陶磁器類が少ない特異な傾向をみせている。出土遺物は II 層からが最も多く、全体の 31% を占める。

陶器

248点出土し、近世のものは216点ある。産地は大堀和馬が最も多く、全体の40%を占める。この他に肥前、小野和馬、瀬戸美濃、岸、堤のほか、少量ながら京・信楽、丹波、志戸呂などがある。器種は碗類が最も多く50%を占め、この他に皿類、鉢類、搦鉢などがある。Ⅱ層からは18世紀代の大堀和馬の掛け分け碗(第35図1)、灰釉皿(第35図2)、19世紀前半に位置づけられる堤の鉄輪搦鉢(第35図5)などがある。その他には17世紀後半の常滑大甕の口縁部が出土している(第35図4)。Ⅴc層からは産地不明であるが、陶器の丸碗が出土している(第35図3)。高台に特徴があり、しっかりとした逆凸状である。器形は瀬戸美濃の丸碗、京焼の半球碗に近いが該当産地がなく、在産品の可能性もある(注11)。

軟質施釉陶器

9点出土し、全てⅡ層より上層からである。堤の焼色のほか、産地不明の碗類、皿類がある。

磁器

369点出土し、近世のものは214点ある。産地は肥前が圧倒的に多く、全体の80%を占める。この他に波佐見、瀬戸美濃、切込、中国がある。瀬戸美濃、切込はⅡ層より上層から出土している。器種は碗類が多く、54%を占め、他に皿類、鉢類がある。Ⅱ層出土のものでは19世紀中葉の瀬戸美濃の端反碗(第35図10)、19世紀前半の切込の端反碗がある(第35図6)。Ⅴc層では18世紀前半の肥前の型紙摺絵の折口(第35図9)、白磁の小坏(第35図7)、当輪草木文の皿(第35図8)がある。白磁の小坏はⅤc層より法量は不明であるが接合関係のない破片が6点出土している。

土師質土器

128点出土し、64%はⅤ層中からのものである。器種は皿類がほとんどで97%を占めるほか、焼塩壺がわずかにある。皿類は破片が多く全体を復元できるものは少ないが、Ⅴc層から出土した3点(第36図1～3)は、12.3cm、15.0cm、11.4cmの口径があり、大きく2種類の大きさに分けられる。2と3のI縁部には煤が付着しており、灯明具として使用されたとみられる。Ⅴc層出土の焼塩壺は外面に斜格子状のタタキが施されている在産品の製品で、時期は17世紀後半から18世紀前半のものとみられる(第36図4)。

瓦質土器

22点出土し、小破片が多い。器種は鉢類、蚊遣り、搦鉢などがある。搦鉢は攪乱出土のもので、17世紀前半とみられる。瓦質土器についてはⅡ層より上層及び攪乱出土のものはこの搦鉢のみが近世のものとされる以外、他は全てⅡ層以下及び遺構内から出土したものに限られる。

瓦類

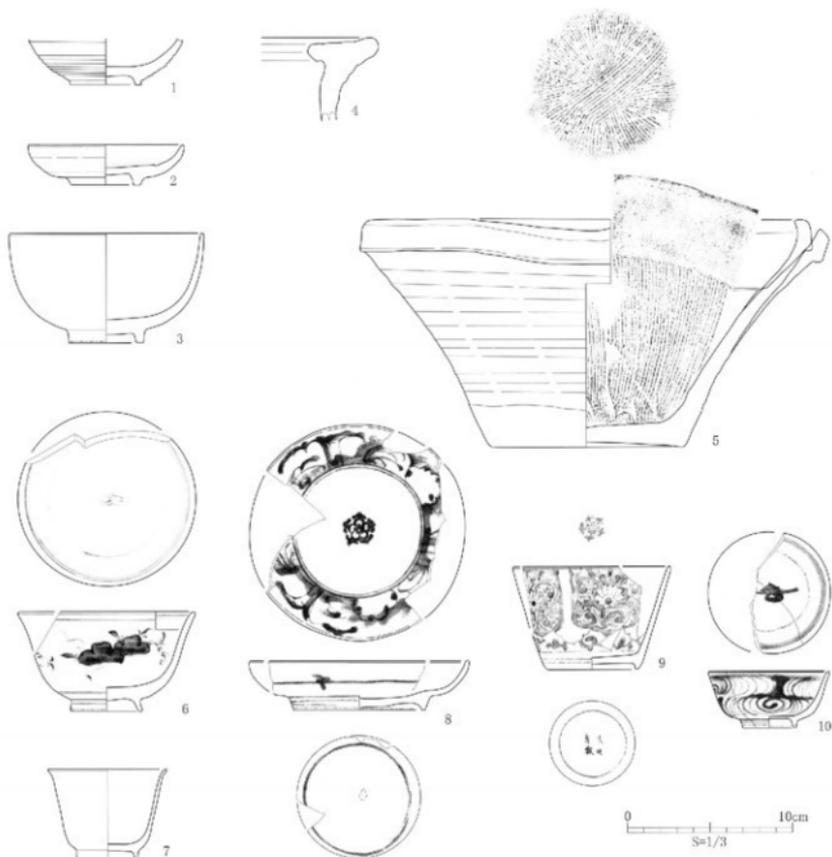
62点出土し、丸瓦22点と平瓦31点が全体の85%を占める。導水トンネルの掘り方中より刺花菱文の滴水瓦(第36図6)、Ⅰ・Ⅱ層中からは鯉瓦の一部が出土した。この他に軒丸瓦がⅡ層より2点出土している。軒丸瓦の瓦当文様は右巻の連珠三巴文である。

土製品

4点出土した。Ⅱ層から型押成形の天神人形(第36図5)と人形の破片、Ⅳ層からは摩滅が激しい人形の頭部、S159からは人形の破片が出土している。

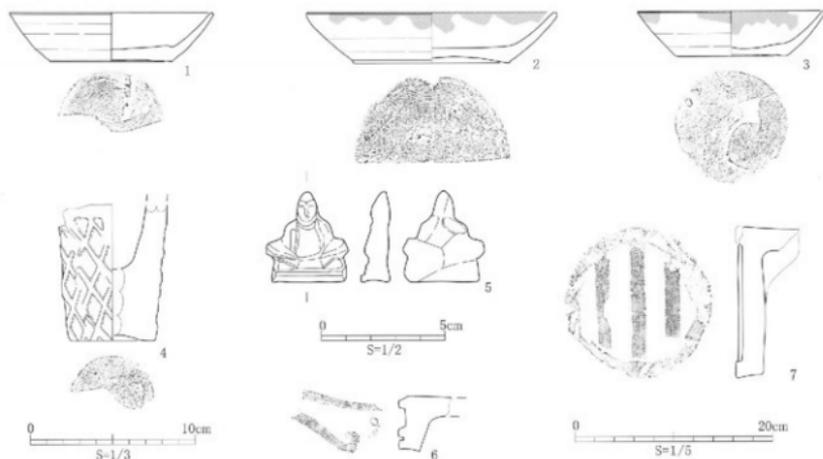
金属製品

75点出土し、種別は釘、古銭、煙管、銃弾、薬莖などがある。釘はⅡ層とS163から出土したものの以外は丸釘で、近現代のものである。古銭は7点出土し、うち5点はⅡ層からのもので、内訳は新寛永通宝3点、古寛永通宝1点、康熙通宝(初鑄年:1662年)1点である。この他にⅣ層より古寛永と新寛永が1枚ずつ出土している。煙管はS157より吸口部分とⅤc層より火皿部分が出土した。



図録番号	登録番号	種名	器種	造形・装飾	寸法(cm)			産地	時代	備考	写真番号
					口径	底径	高さ				
1	108	陶器	碗	■底	—	4.3	—	大塚郡尾	18c代	内面：鉄粒 内底：灰粒 磨けかけ痕	9-1
2	110	陶器	皿	■底	(9.3)	(4.1)	2.5	大塚郡尾	18c代	灰粒 磨けかけ痕	9-2
3	109	陶器	碗	V:■底	(11.8)	4.5	6.7	不明	18c前半	灰粒 内底：磨けかけ痕 在地面の可能性あり。	9-3
4	111	陶器	大碗	■底	—	—	—	不明	17c後半	—	9-4
5	109	陶器	鉢	■底	(8.4)	11.6	14.0	尾	19c前半	鉄粒 滑石12% (18cm)	9-5
6	787	磁器	碗	■底	16.6	4.2	6.1	尾	19c前半	染付 外底：花唐草文 染込：唐草文	9-6
7	786	磁器	小鉢	V:■底	(7.0)	(3.7)	(3.5)	尾	18c前半	内底	9-7
8	790	磁器	鉢	V:■底	13.1	8.9	3.0	尾	18c前半	染付 外底：唐草文 内底：宝篋草木文 光込：コンニャク白粉5%付	9-8
9	794	磁器	酒口	V:■底	(3.0)	5.4	6.3	尾	18c前半	染付 内面：空閑餅子唐草文 外底：手繰き五弁唐 磨けかけ	9-9
10	796	磁器	高足碗	■底	7.2	3.2	3.5	尾(不明)	19c前半	染付 内面：唐 外底：空閑文 内面口縁：無敵唐文 磨けかけ	9-10

第35図 第3次調査出土遺物(1)



調査番号	器物番号	種類	副種	造形・形状			産地	時期	備考	写真番号	
				高さ	径	厚さ					
1	I 145	土師器土器	皿	Vc形	(12.30)	7.4	2.7	石浜	冠注	シクハ陶器 左回転内面蓋	9-11
2	I 150	土師器土器	皿	Vc形	(15.40)	9.4	3.1	石浜	冠注	シクハ陶器 左回転内面蓋 縁にススが厚く付着	9-12
3	I 148	土師器土器	皿	Vc形	11.4	5.5	2.8	石浜	冠注	シクハ陶器 左回転内面蓋 口縁にススが付着	9-13
4	I 147	土師器土器	煎茶缶	Vc形	—	13.00	—	石浜	口縁にススが付着	シクハ陶器 底面：左回転内面蓋、煎茶器ナシ 外底：斜格子状の押印	9-14

調査番号	器物番号	種類	副種	造形・形状			備考	写真番号		
				高さ	径	厚さ				
5	F 4	土師器	人形	坐	2.7	5.4	1.2	15.1	帯押し人形 天押	9-15

調査番号	器物番号	種類	副種	造形・形状	文様	径 (cm)		厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	写真番号
						最大	最小				
6	F 6	土師器	文様	網目文	—	—	—	0.6	0.19	—	9-16

調査番号	器物番号	種類	副種	造形・形状	文様	径 (cm)	高さ (cm)		重さ (kg)	備考	写真番号
							最大	最小			
7	F 8	土師器	瓦	縦三引瓦	—	15.4	15.0	1.5	0.9	—	9-17

第36図 第3次調査出土遺物(2)・表面採集遺物

石製品

S 160より砥石が1点出土した。

その他の遺物

中世以前の遺物が4点出土したが、全てI・II層や攪乱からである。内訳は土師器3点、中世陶器1点で、土師器は小破片のため時期は不明であるが、中世陶器は常滑で小破片のため器種は不明である。

(注8、9) 松本秀明氏による。

(注10) 藤澤 敦氏による。

(注11) 鈴木裕子氏による。

第4節 表面採集遺物

追廻地区の南西側にあるテニスコートの脇で追廻地区の住民の方が採集した瓦である(第36図7)。種別は軒丸瓦で、文様は縦三引両文である。

陶磁器類・土師質土器・瓦質土器・土製品

土器分類	品名	器種(用途)																	器形(形状)										器高		器径		器容	
		炊器			煮器			貯器			盛器			飲器			土師質土器			瓦質土器			土製品			器高	器径	器容	器高	器径	器容			
		竈	釜	鍋	甕	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗	甗					
1-11	磁器	1																																
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	
	磁器																																	

第2表 出土遺物集計表(1)

第3章 理化学分析

はじめに

仙台城遺跡地区は仙台城三の丸の外側にあたり、仙台藩の家臣片倉家の屋敷や馬場が置かれたとされる。今回の確認調査では、第1次調査1号トレンチからは火山灰の可能性が指摘される堆積物、第2次調査1号トレンチからは火山跡の可能性が指摘される土層、5号トレンチからは畑耕作跡の可能性が指摘されるS88溝跡の土壌サンプルが採取されている。

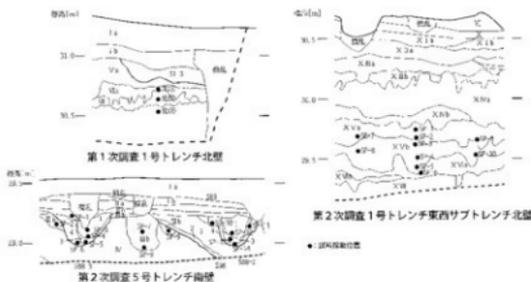
本報告では、1)火山灰の同定、2)水田跡の検証、3)溝跡の用途推定に関する情報を得ることを目的として、テフラ分析、植物珪酸体分析、花粉分析を実施する。

1 試料

テフラ分析に用いる試料は、第1次調査1号トレンチ北壁の東端付近から採取された。採取箇所では、下位よりⅦ層～Ⅰa層に分層されており、Ⅴa層を削りてS1の遺構覆土が確認され、上位をⅠb層に覆われている。試料採取箇所では、Ⅶ層～Ⅴa層の各層は、厚さ5～10cmで互いの層界はやや不明瞭であるがいずれも波状をなしている。Ⅶ層の下層は確認されていない。Ⅴa層及びⅥa層はいずれも暗褐色の土壌であるが、Ⅶ層にはぶい黄褐色を呈するシルト質極細砂である。発掘調査所見では、Ⅶ層は火山灰(テフラ)層で、T o o a(後述)に由来する可能性があると考えられている。試料は、遺構覆土直下のⅤa層からⅦ層まで約30cmの厚さの土壌を幅10cm程の柱状にして採取されている。試料には、Ⅵa層に北①、Ⅶ層に北②、Ⅶ層に北③という試料名が付されており、北②についてテフラ分析を実施する。

植物珪酸体分析に用いる試料は、第1次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁の中央部付近から採取された。本地点からは弥生時代の遺物が出土している。本地点では下位よりXⅦ層～Ⅶ層に分層されており、試料はXⅤb層、XⅤa層からS P 1～S P 10の10点がフィルムケースで採取されている。このうち、S P 1、4、6の計3点について植物珪酸体分析を実施する。

花粉分析に用いる試料は、第2次調査5号トレンチ南壁から採取された。本地点では畑耕作跡の可能性が指摘される溝跡が検出されている。本地点では下位よりⅤa層～Ⅰa層に分層されており、Ⅲa層以深を削りて溝遺構覆土が埋積する。試料は、溝覆土のS88-1の1～4層、S88-2の1～3層、S80の1層、及びⅢb層からS P 1～S P 14の14点がフィルムケースで採取されている。このうち、S P 3、6、8、10、14の計5点について花粉分析を実施する。各地点の模式断面図及び試料採取位置を第37図に示す。



第37図 各地点における模式断面と試料採取位置

2 分析方法

(1) テフラ分析

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状及び気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入してプレパラートを作成する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量を図示する。

(3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

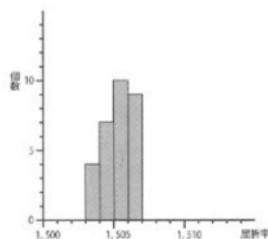
結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3 結果

(1) テフラ分析

処理後に得られた砂分には、中量の細砂～極細砂径の火山ガラスと微量の軽石が認められた。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型や極めて微量の褐色を帯びたバブル型も認められる。軽石は、最大径約 1.2mm、白色を呈し、発泡はやや良好である。

火山ガラスの屈折率測定結果を第 38 図に示す。n1.504～1.507 のレ



第 38 図 火山ガラス屈折率

ンジに入り、n1.505 ~ 1.506 にモードがある。

(2) 植物珪酸体分析

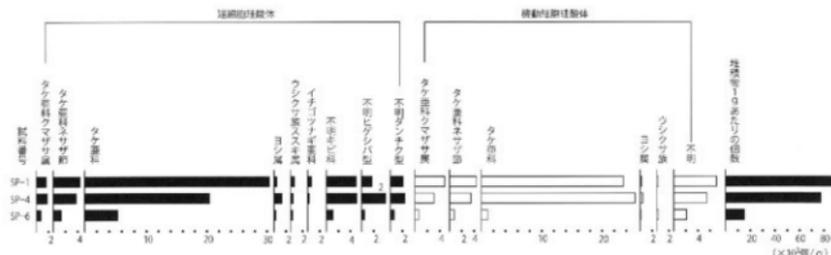
結果を第 4 表、第 39 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

第 2 次調査 1 号トレンチ東西サブトレンチ北壁の S P-1、4、6 からは、栽培植物のイネ属が全く検出されない。また、各試料では植物珪酸体含量に違いが見られるものの、産状は同様である。すなわち、クマザサ属やネザリサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

種 属	検出試料 1 号トレンチ東壁サブトレンチ北壁		
	試料番号	SP-1	SP-4 SP-6
イネ科葉部珪酸体珪酸体	1,700	1,800	700
タケ亜科イネザサ属	4,400	3,700	1,300
タケ亜科ネザリ節	10,400	20,400	3,400
コシサ	400	1,300	300
ウシクサ属ススキ属	600	400	300
イチゴツナギ亜科	600	200	-
不明トビ	5,000	5,100	1,100
不明トビ(2)	1,700	4,800	500
不明トビ(3)	2,700	2,400	400
合計	7,100	5,900	2,100
イネ科葉部珪酸体珪酸体	46,800	39,300	10,300
イネ科葉部珪酸体珪酸体	40,700	39,600	4,400
合計	87,500	78,900	14,700

※単位は、10⁶で丸めている(10⁶単位にする)
なお、合計は各分類群の丸めなし数字を合計した値(丸めしている)

第 4 表 植物珪酸体含有量



第 39 図 植物珪酸体含有量 堆積物 1 g あたりに換算した個数を示す。

(3) 花粉分析

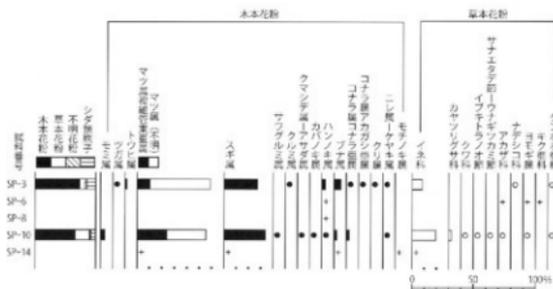
結果を第 5 表、第 40 図に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を + で表示するにとどめておく。

全体的に花粉化石の産出状況・保存状態が悪く、第 2 次調査 5 号トレンチ南壁の S P-6、8、14 からは定量解析が行えるだけの個体数を得ることが出来なかった。

S P-3、S P-10 からは花粉化石が産出するものの、保存状態は良好ではなく、花粉外膜が破損・溶解しているものも多く認められた。群集組成はいずれも類似しており、木本花粉が優勢し、マツ属とスギ属が多産する。その他ではトウヒ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等が認められる。草本花粉の中ではイネ科が多く認められ、カヤツリグサ科、アカザ科等を伴う。

種 属	第 2 次調査 5 号トレンチ南壁			
	試料番号	SP-3	SP-6	SP-8 SP-10 SP-14
木本花粉	-	-	-	7
マツ属	-	-	-	7
スギ属	-	-	-	7
トウヒ属	2	-	-	4
アカザ科植物葉部珪酸体	15	-	-	51
マツ属 (不明)	70	-	-	57
ススキ属	30	-	-	72
カヤツリグサ属	-	-	-	1
クワカ属	-	-	-	1
アカザ科葉部珪酸体	-	-	-	1
カヤツリグサ属	-	-	-	1
ハンノキ属	4	1	1	2
ブナ属	6	-	-	5
コナラ属コナラ亜属	1	-	-	5
コナラ属アカザ科	1	-	-	1
ウツギ属	1	-	-	1
トウヒ属	1	-	-	1
イネ科葉部珪酸体	-	-	-	1
草本花粉	36	-	-	62
イネ科	-	-	-	1
カヤツリグサ科	-	-	-	1
アカザ科	-	-	-	1
イネ科トリアリイ	-	-	-	2
ササ科トリアリイ	-	-	-	1
アカザ科	-	-	-	2
ナデシコ科	1	-	-	-
ヨモギ科	-	-	-	1
ススキ属	-	-	-	1
ラン科トリアリイ	1	-	-	-
合計	144	1	1	213
木本花粉	16	4	0	78
草本花粉	5	0	0	9
シダ植物	30	7	7	5
合計 (不明を除く)	192	12	4	108

第 5 表 花粉分析結果



第 40 図 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお●は1%未満、+は木本花粉100固体未満の試料について検出した種類を示す。

4 考察

(1) 火山灰の同定

試料より検出された細粒の軽石および火山ガラスは、その特徴および仙台城の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか,1981,1984;Arai et al,1986;町田・新井,2003など)との比較から、十和田aテフラ(T-o-a)の降下堆積物に由来すると考えられる。T-o-aは、平安時代に十和田 Caldera から噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田・新井(2003)に記載されたT-o-aの火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.496} \sim 1.508$ の広いレンジを示す。ただし、 $n_{1.502}$ 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている(町田ほか,1981)。今回検出されたテフラは $n_{1.504} \sim 1.507$ のレンジに入ることから、おそらく低屈折率の火山ガラスを含まないT-o-aに相当するものと考えられる。

トレンチ断面におけるVII層の堆積状況は、上下の土層との層界がやや不明瞭かつ波状を呈することから、T-o-aの降下堆積層が堆積後の土壌化等により攪乱を受けたものであると考えられる。分析処理後に得られた砂分において、火山ガラスや軽石以外のT-o-aには由来しない碎屑物の方が量的には多く含まれていたことも、そのことを示唆している。ただし、VII層の攪乱は、第1次調査1号トレンチS1とされる遺構覆土まで及んでおらず、遺構よりも明らかに下位である。このことから、遺構の構築はT-o-aの降灰以降であるといえる。

(2) 水田跡の検証

弥生時代の遺物が出土した第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁XV層において、調査した土壌試料からイネ属に由来する植物珪酸体が検出されなかった。そのため、今回の産状のみからXV層での稲作の可能性を判断することは難しい。今後さらに、同層位について複数地点でイネ属珪酸体の有無を調べるとともに、花粉分析や種実遺体による調査、土壌の微細構造の観察による耕作痕の確認を含めて検討することが望まれる。

なお、植物珪酸体の産状からクマザサ属やネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物の生育がうかがえる。このうち、ネザサ節やススキ属は開けた草地に生育する種類が多い。また、ヨシ属は湿潤な場所に生育する。そのため、トレンチの周辺には草地や湿潤な場所が存在していたと思われる。

(3) 溝跡の用途推定

今回分析した試料は、花粉化石の産出状況の悪い試料が多く認められ、かろうじて産山が認められる試料においても花粉化石の保存状態が悪い。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。検出された花粉化石の保存状態を考慮すると、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。このことを考慮した上で、検討を行う。

第2次調査5号トレンチ南壁に認められた溝跡は、調査所見から畑耕作跡の可能性が指摘されている。しかし、今回分析したいずれの試料においても、栽培に関わる種群は1個体も検出されなかった。よって、花粉分析の結果から、栽培植物の検討をすることは難しい。ここで、仙台市内においても多くの遺跡から畑跡が検出されている(佐藤,2000など)。しかし、畑は好気的環境であるため、直接畑作を示唆する植物化石が検出する事例は少ない。このような場合、同時期の井戸・土坑等の埋積物からの検討も有効である。したがって、本遺跡の栽培植物についても、植物珪酸体分析、土壌の洗い出し等を実施し、併せて検討することが望まれる。

周辺の植生を反映する種類についてみると、上述の分解の影響を受けたことを考慮してもマツ属とスギ属の多産が顕著である。多産するマツ属のうち亜属まで同定できたものは、全て複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。一方スギ属は、人工林では山腹斜面下に出現し、水分・養分の供給が十分で、水はけの良い土壌でもっともよく生育するとされている。よって、当時の本遺跡周辺に、マツ属、スギ属の林分が存在したと考えられる。

その他の種類では、トウヒ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等が認められる。このうちブナ属、コナラ亜属は冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ハンノキ属等は河畔や低湿地等の適湿地に林分を形成する種群である。よって、これらのことから、周辺の丘陵部等にはブナ属・コナラ亜属等の落葉広葉樹林と、部分的にトウヒ属等の針葉樹が分布しており、広瀬川沿い等の低湿地にハンノキ属を主体とする林分が形成されていた可能性がある。

本地域周辺の植生変遷については、仙台市史編さん委員会(1994)にまとめられており、それによると丘陵下部では約7,000年前以降はコナラとイヌブナが広く多い、排水の良い場所にはアカマツが生育していたと考えられている。約2,500年前頃になると平野部でハンノキ林が拡大をはじめ、500年前以降はアカマツ林や植林と思われるスギ林が優勢となるとされている。今回の結果は、既存の分析結果とも調和的な種類が検出されることから、同様の植生を反映している可能性がある。

なお、草本類ではイネ科をはじめ、カヤツリグサ科、アカザ科等が認められた。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、その他に検出されるいずれの草本類も同様の生育環境を示す。よって、溝周辺には草地が存在し、そこにこれらの草本類が生育していたと推測される。

引用・参考文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.『Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -』『Geographical reports of Tokyo Metropolitan University』No.21,223 - 250,1986

古澤 明「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』

101,123 - 133,1995

早川 山紀夫・小山 真人「日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月口一十和田と白頭山一」『火山』43,403 - 407,1998

近藤 鎌三「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48,46 - 64,2004

町田 洋・新井 秀夫『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会,336p,2003

町田 洋・新井 秀夫・森島 広「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51,562 - 569,1981

町田 洋・新井 秀夫・杉原 重夫・小田 静夫・遠藤 邦彦,1984,「テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—」渡辺直経(編)『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋舎,865 - 928,1984

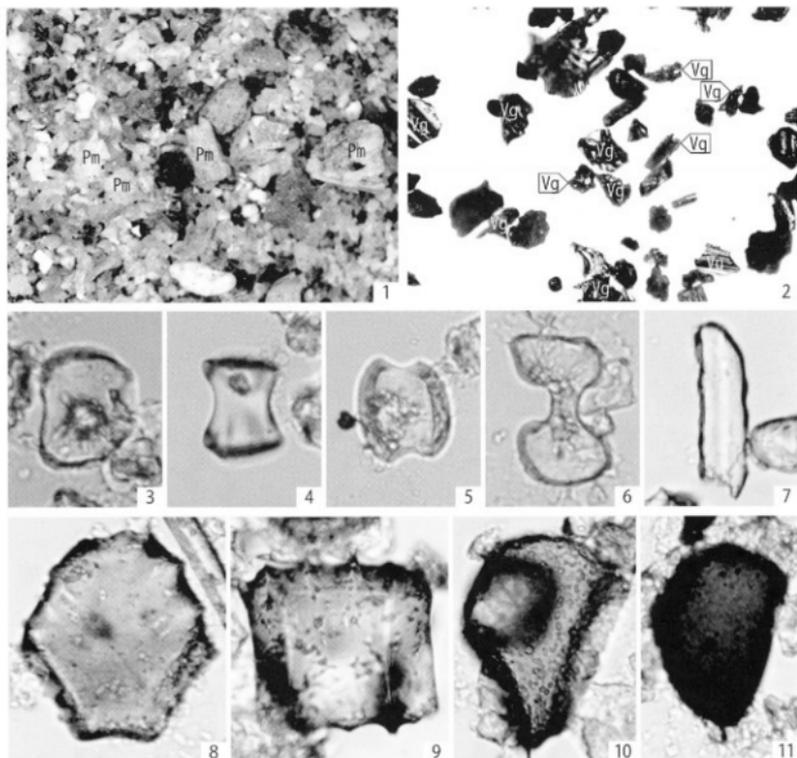
三宅 尚・中越 信和「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6,15 - 30,1998

中村 純『花粉分析』古今書院,232p,1967

佐藤 甲二「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題—仙台市域の調査事例をとおして—」『日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会資料集 第 1 集 はたけの考古学』日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会実行委員会編 16 - 25,2000

仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編 1 自然』仙台市,520p,1994

徳永 重元・山内 輝子『花粉・胞子、化石の研究法』共立出版株式会社,50 - 73,1971

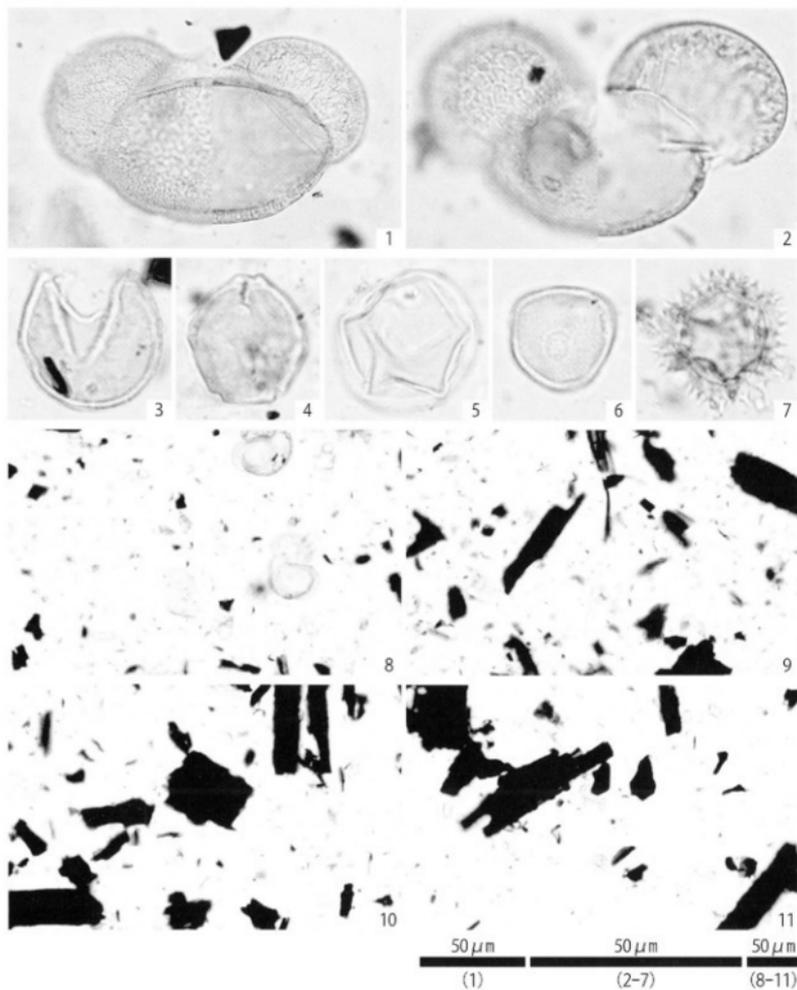


Pm: 軽石, Vg: 火山ガラス.



1. 軽石(第1次調査1号トレンチ北壁:北②)
2. 火山ガラス(第1次調査1号トレンチ北壁:北②)
3. クマザサ属短細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-4)
4. ネザサ節短細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-4)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-4)
6. ススキ属短細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-4)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-1)
8. クマザサ属機動細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-6)
9. ネザサ節機動細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-1)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-4)
11. ウシクサ属機動細胞珪酸体(第2次調査1号トレンチ東西サブトレンチ北壁:SP-6)

第41図 テフラ・植物珪酸体



- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1, モミ属(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) | 2, マツ属(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) |
| 3, スギ属(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) | 4, ハンノキ属(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-3) |
| 5, イネ科(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) | 6, カヤツリグサ科(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) |
| 7, タンポポ科(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-10) | 8, プレバート内の状況(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-3) |
| 9, プレバート内の状況(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-6) | 10, プレバート内の状況(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-8) |
| 11, プレバート内の状況(第2次調査5号トレンチ南壁:SP-14) | |

第42図 花粉化石

第4章 まとめ

仙台城跡追廻地区の遺構調査は第1次から第3次調査までの3回にわたり、計11か所のトレンチを設定し、総面積727.1㎡を対象に行った。そのうち第1・2次調査は追廻地区における主に近世遺構の遺存状況を確認することを目的とし、また第3次調査は地区南東縁辺における護岸石垣の確認を目的として行った。護岸石垣については確認することができなかったが、地区内での河川側縁辺部における遺構の状況を確認することができた。

「仙台城下絵図」（寛文4 [1664]年）や「安政補正改革絵図」（文久2 [1855]年）などの絵図によると、本地区は仙台城が造営された江戸時代初期から幕末に至るまで、地区北側が家臣屋敷地、南側が馬場や厩などが配置され、その地割に大きな変化はみられない。今回の調査では近世を中心に複数の整地面と多くの遺構を確認し、また全体的には家臣屋敷地と馬場などの性格が異なる地区により整地状況の違いなどを確認した。以下、地区ごとに確認した主な整地土や遺構についてのまとめとする。

北部（大手筋南側）の状況

この地区は藩政期を通して大身の家臣屋敷が配置されており、延宝5年以降、幕末に至るまで片倉氏の屋敷となっている。「片倉氏仙台屋敷落主御成図」によると、屋敷建物は敷地西側に位置し、河川に近い東側は庭として利用されている。今回の調査では第1次調査点1～3号トレンチ（1-1T～1-3T）と、第2次調査1号トレンチ（2-1T）がこの付近にあたるとみられる。

確認した遺構は自然の窪地あるいは人為的掘り込みかは不明であるが、河川側に向かい傾斜する複数の大型の落ち込みの存在が想定される。2-1Tでは南側に傾斜する落ち込みを確認し、その傾斜を利用して構築されたと思われる石組みを伴う池跡（S19）を確認した。調査範囲が狭いため、池跡の構造や規模についての詳細は不明だが、池跡は屋敷地の南側に位置するとみられ、絵図によるとそこには池が確認できることから、確認した池跡は片倉屋敷内における池の可能性が高い。また池跡（S19）の上層には炭化物を多量に含む層が認められているが、屋敷は弘化3（1846）年9月に焼失した記録があることから、池跡（S19）はこの時期に埋没した可能性が考えられる。

中央部の状況

「仙台城下絵図」（寛文4 [1664]年）などによると、地区中央部付近には西側の賢門より追廻への通路が存在し、この通路北側には家臣屋敷地、南側には馬場や厩などが配置されていたことがわかる。今回の調査では第2次調査の2-7トレンチ（2-2T～2-7T）がこの位置にあたる。地区の整地状況を見ると、中央部付近に位置する2-3Tと2-4Tでは1m前後の厚さの整地層がみられる一方、河川に最も近い2-5Tでは厚さが約0.3mと薄くなっている。これは後世の改変等の影響も考えられるが、同地区内においても施設の違いにより整地等の皆請の程度を変えていたものと推測される。

確認した遺構のうち、溝跡、石敷遺構、石組遺構、柱穴列の方向は、ほぼ真北もしくは東西方向を基準に造られている。これらについては遺構確認範囲が広く、かつ検出面も異なるものも多いが、絵図に記されている施設や区画の方向に概ね沿ったものとなっている。

2-2Tで確認したS45とS46の溝跡は、同一面上で近接して平行に並んでおり、S45は暗渠として利用され、S46は木樋を伴うもので、これらは建物やその近辺にある付属施設の可能性があることから、付近に建物跡の存在が推測される。2-3Tで確認したS62はほぼ真北方向の石組溝跡で、これと平行するS63・64石組遺構や、直行するS65・66石組遺構との配置関係から、屋敷内の地割となる何らかの施設として機能したとみられる。2-4TのS74は下層での確認で規模は不明であるが、東西方向に延びる石敷の遺構と推定される。同ト

S 114・S 115 があり、これらの方向はほぼ北である。今回の調査では各々の遺構の年代を明らかにするには至っていないが、地区の地割に大きな変化がみられないことから、当時の施設の配置関係を示している可能性がある。

南部の状況と護岸石垣について

護岸石垣については、第二師團設置に伴う追廻地区の大規模な改変に伴い、現在では確認することができない。第3次調査（3-1 T）地点においては、石垣が想定される位置にトレンチを設定したにもかかわらず、その存在を連想させる構造物などは全く確認できず、石組遺構や度重なる整地土などを数多く確認している。

第3次調査で確認した近世遺構の中で最も新しい遺構は、S 165 と S 166 により構成される版築状の整地土とみられる。トレンチ西端の整地層が第2次調査6 T や7 T のものと同一層とみられることから、版築状整地土の構築範囲はこの地区に限られたものと推定される。また整地土が傾斜した南側部分には石組溝と石敷きによる石組遺構（S 167）があり、これら両遺構は一体的構造をもった何かしらの遺構の可能性はある。

石組み列による S 175 については溝跡か、あるいは石列の北側を高部位とする段差部分に構築された石積みの可能性がある。またその東端では同じく石組み構造をもつ S 178・180 の石組溝と T 字に接続しているが、これらは時期の異なる遺構である可能性があるほか、接続部分の壁石の位置関係からみて、両者は同時に機能していたことも考えられる。さらに S 178・180 の南北方向の溝跡の東側に平行して構築される S 179 の石組みは、東の河川側に段差を造るために構築された土留め的な石積みの可能性があり、これは後にⅢ層による土盛りにより埋められ、平坦地とされている。このようにトレンチ中央から東南部の遺構の状況は、石を組んだ溝や井戸など、水との関連性を強く思わせる遺構が多く、また河川との境界地区らしく、土地縁辺部における土盛りなどの土地造成に関わるものが主体とみることができる。出土遺物を見ると、S 175 の V c 層からは18世紀前半の遺物がややまとまって出土しており、これが当地区で確認できる遺構に伴う最も古いものである。以上のことから、本地区においては18世紀前半代よりその時々土地利用の目的に合わせて段差や溝を造り、あるいは土盛りなどの土木作業を繰り返しながら各所に施設を構築し、現在に至っていることがわかる。

今回の調査においては本来の目的であった護岸石垣の存在を確認することができなかった。石垣は近代における本地区の改変に伴い、石垣石材が解体撤去されている可能性も十分考えられるが、裏込め部分や基礎部分などそれ以外の構造物が遺存している可能性は高いといえる。そのため石垣はトレンチの西側かあるいはトレンチ東側に近接する段丘岸との間に存在しているものと考えられるが、現時点では不明と言わざるを得ない。また近世段階での石垣の東西両側の隣接地がどのような状況にあったのかを知ることは難しいが、石垣は正保年間には既に構築されており、その内側には既に馬場にかかわる諸施設が存在していたことを考えた場合、第3次調査で確認した度重なる大規模な土木作業（営繕）をそれら施設の改修に伴うものとみるか、あるいは石垣外側への新たな地区の拡張とみるかについては本地区のみならず、周辺地区全体での層位や遺構の状況を広範囲に検討する必要がある。

引用・参考文献

『伊達治家記録』（貞山公治家記録）

佐藤 巧 『近世武士住宅』昭和54年（1979）

我及健治・平井 聖・八木清勝 『よみがえる白石城』平成7年（1995）

松山正将 『元仙台愛宕下発電所導水トンネルについて』『宮測協』No.29 平成9年（1997）

仙台市教育委員会 『仙台城跡1～8』平成13～20年（2001～2008）

仙台市史編さん委員会 『仙台市史 通史編4 近世2』平成15年（2003）

仙台市史編さん委員会 『仙台市史 特別編7 城館』平成18年（2006）

仙台市教育委員会 『仙台城跡登城路1次調査』平成18年（2006）



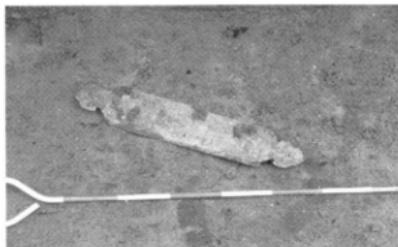
1-1 T 全景 (東から)



1-1 T 南側サブトレンチ南壁 (北東から)



1-1 T 北側サブトレンチ北壁 (南東から)



1-1 T 飾り金具出土状況 (北から)



1-2 T 全景 (南から)



1-2 T 西側サブトレンチ西壁 (南東から)



1-2 T 西側サブトレンチ西壁 (北東から)



1-2 T 東西サブトレンチ南壁 (北西から)

写真図版 1



1-3 T 全景 (南西から)



1-3 T 西側サブトレンチ西壁 (北東から)



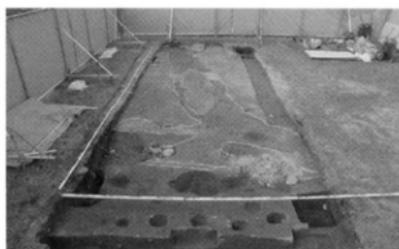
2-1 T 全景 (南西から)



2-1 T 西側サブトレンチ西壁 (南東から)



2-1 T S19 検出状況 (南西から)



2-2 T 全景 (南から)



2-2 T 東側サブトレンチ東壁 (南西から)



2-2 T S 45・S 46 検出状況 (東から)



2-3 T 全景 (北から)



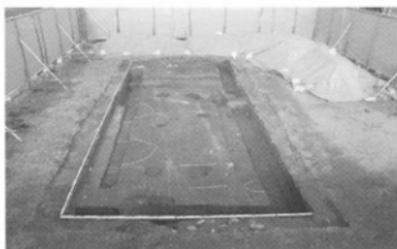
2-3 T 東側トレンチ東壁 (南西から)



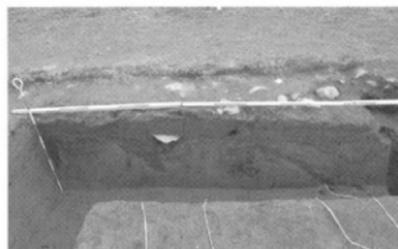
2-4 T 全景 (南から)



2-4 T 西側サブトレンチ西壁 (北東から)



2-5 T 全景 (南から)



2-5 T 東西サブトレンチ南壁 (北から)



2-6 T 全景 (北から)



2-6 T 西側サブトレンチ西壁 (北東から)



2-7 T 全景 (北から)



2-7 T 東側サブトレンチ東壁 (南西から)



3-1 T 全景 (東から)



2-7 T 中央サブトレンチ西壁 (南から)



3-1 T 西壁 (東から)



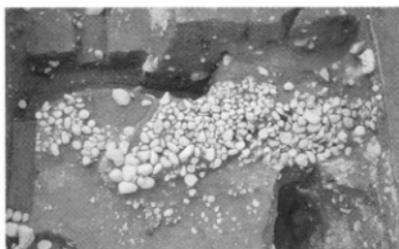
3-1 T IV層堆積状況 (北西から)



3-1 T 中央部分南壁 (北東から)



3-1 T 東端部分南壁 (北東から)



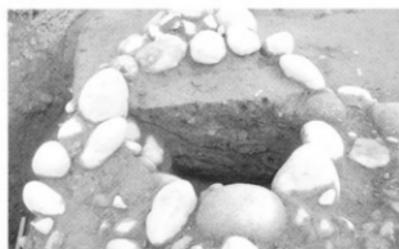
3-1 T S 165・S 166 検出状況 (東から)



3-1 T S 167 検出状況 (東から)



3-1 T S 175・S 178・S 180 検出状況 (東から)

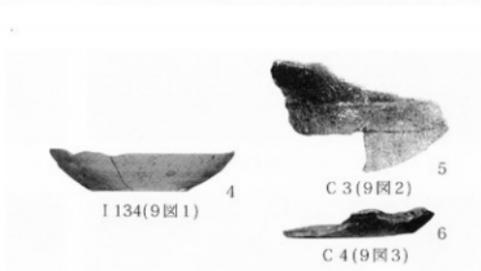
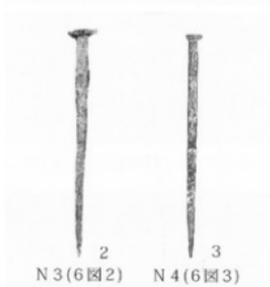
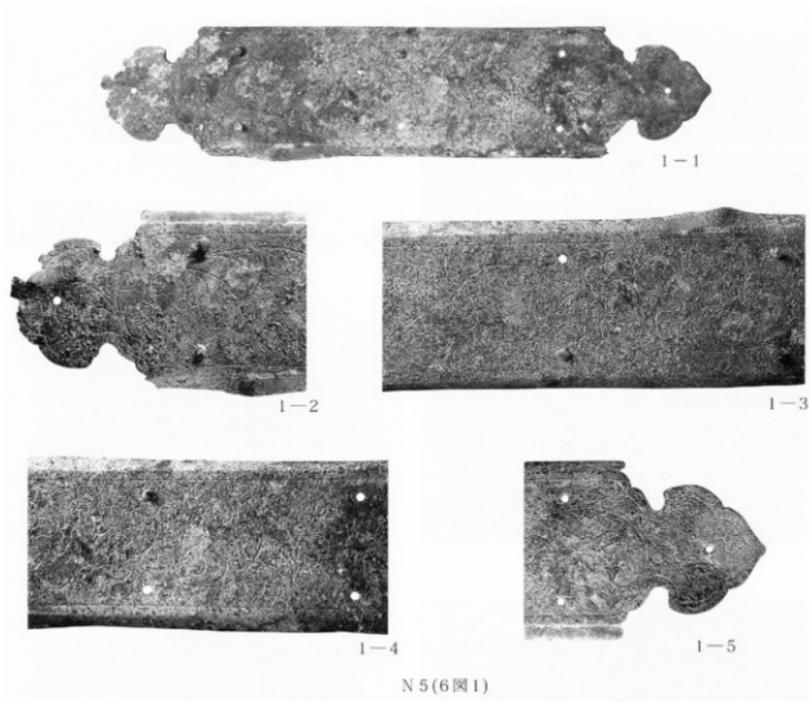


3-1 T S 168 断面 (西から)



3-1 T S 178・S 179・S 180 検出状況 (北から)

写真図版 5



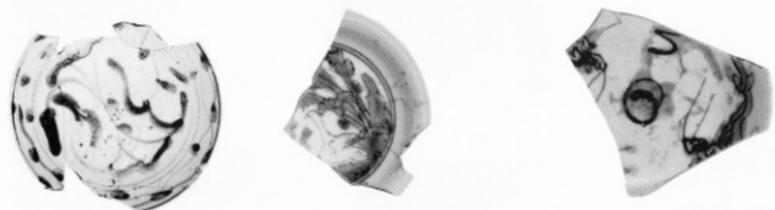
S-約1/2: 1~3, 約1/3: 4~7, 約1/5: 8~9

写真図版 6 第1次調査出土遺物



I 20(17図1)

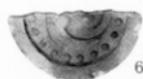
I 25(17図2)



J 35(17図3)

J 40(17図4)

J 41(17図5)



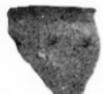
F 5(18図1)



H4(18図2)



B 6(18図3)



B 7(18図4)



K 1(18図5)

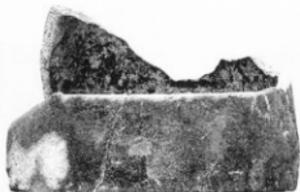
10

S-約1/3:1~5・8・9、約1/5:6・7、約2/3:10

写真図版7 第2次調査1号トレンチ出土遺物



1
I 39(22図1)

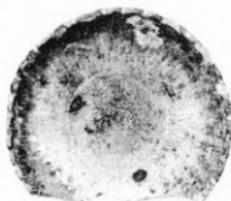


2
I 129(22図2)

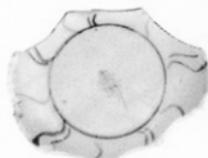
2号トレンチ出土遺物



3
I 53(24図1)



4
I 58(24図2)



5
J 61(24図5)



6
I 67(24図3)



7



8
I 63(24図4)

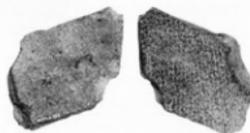
3号トレンチ出土遺物



9
I 145(26図1)



10
I 96(29図1)



11
G 3(29図3)

4号トレンチ出土遺物

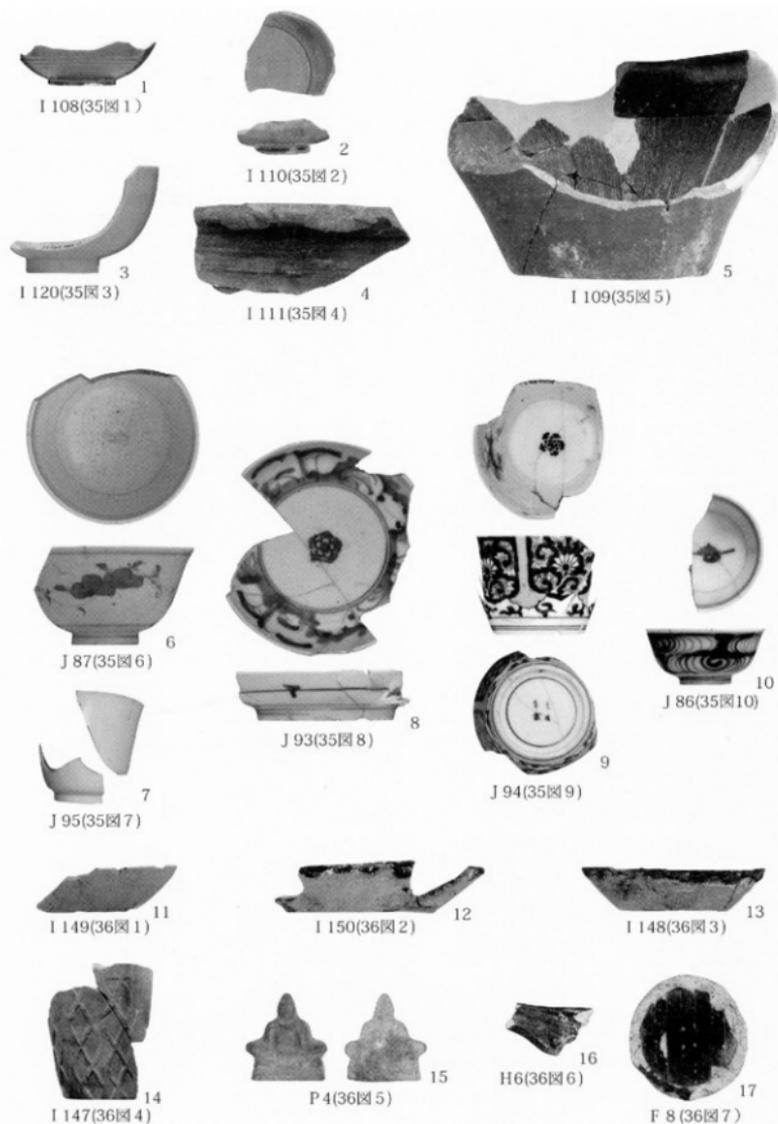


12
I 130(29図2)

6号トレンチ出土遺物

S=約1/3:1~10,約1/5:11

写真図版8 第2次調査2~7号トレンチ出土遺物



S=駒1/3: 1~14, 駒1/2: 15, 駒1/5: 16-17

写真図版9 第3次調査出土遺物・表面採集遺物

報告書抄録

ふりがな	ぜんだいじょうあと おいまわしちくいこうかくにんちようさ						
書名	仙台城跡 一追廻地区遺構確認調査一						
副書名							
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第350集						
編著者名	佐藤 淳・渡部 紀・黒田恵之・大口和樹						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL022-214-8544						
発行年月日	2009年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	調査地点	コード		調査期間	調査面積	調査原因
			市町村 04100 北緯	遺跡番号 01033 東経			
せんたいじょうあと 仙台城跡	みやぎけんせんたいし 宮城県仙台市 あおぼくかわうち 青葉区川内 おいまわしち 追廻地内	第1次調査			2007.3.1 ～ 2007.3.20	183.1㎡	公園整備 に伴う遺 構確認調 査
		第2次調査	38° 15' 11" ～ 38° 15' 27"	140° 51' 30" ～ 140° 51' 35"	2007.10.9 ～ 2007.12.27	367.0㎡	
		第3次調査			2008.8.25 ～ 2008.10.22	177.0㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
仙台城跡	城跡跡	江戸時代	池跡 石組遺構 溝跡 井戸跡 土坑	陶磁器 瓦 金属製品 石製品	第1次調査1号トレンチS3より 飾り金具が出土した。 第2次調査1号トレンチから片 倉家の屋敷絵図に描かれている池 に相当する可能性のある遺構(S 19)を確認した。 第3次調査では石組み遺構や石 敷遺構を発見し、追廻東南端の土 地利用の状況を確認した。		

仙台市文化財調査報告書第350集

仙 台 城 跡

—道灌地区遺構確認調査—

2009年3月

発行 **仙台市教育委員会**

仙台市青葉区国分町3丁目7-1
文化財課 022(214)8544

印刷 株式会社 **東プリ**
東京都大田区蒲田西4丁目41-11
TEL 03(3732)4155

